THE JOURNAL OF
JAPANESE HISTORY OF PHARMACY

薬史學雜誌

Vol. 9, No. 1., 2. 1974

—目　　次—

(原　報)

和漢薬の本草学的研究（第4報）
狼毒について……難波恒雄，米田該典，故 高橋真太郎…… 1

和漢薬薬の本草的研究（第5報）
大戟について……難波恒雄，米田該典，故 高橋真太郎…… 9

(雑　録)

科学史・薬学概論の開講……川　瀬　清…… 17

(史　伝)

「日本薬園史の研究」の著者上田三平伝……三　浦　三　郎…… 19

徐福不老不死の薬を求めて渡来……宮　道　悦　男…… 27

—学　　会—

会計報告…… 26

会務報告…… 32

THE JAPANESE SOCIETY OF HISTORY OF PHARMACY

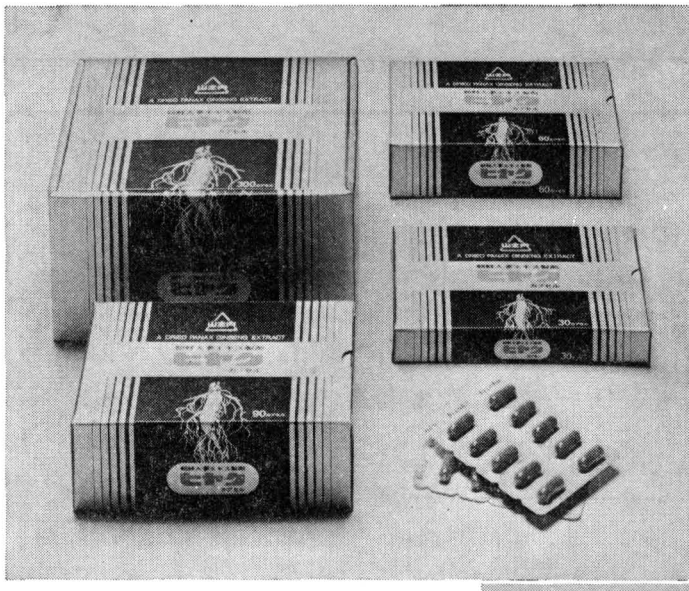
Nihon University, Pharmaceutical Institute,
Kanda-Surugadai, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan

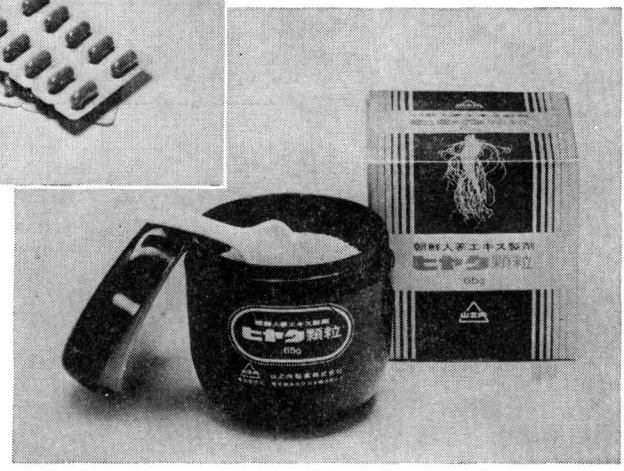
薬 史 学 誌
J. His. Pharm.

日 本 薬 史 学 会

山之内製薬

[朝鮮人蔘エキス ＋ビタミンE]





効　能　健胃整腸，食欲増進，強壮，強心，病弱者の新陳代謝促進，更年期障害，月経困難症

成　分（1カプセル，または顆粒1g中）

朝鮮人蔘乾燥エキス……100mg

ビタミンE酢酸エステル…… 20mg

カプセル30.60.90.300　顆粒65g

朝鮮人蔘エキス製剤

ヒヤク

カプセル・顆　粒

和漢薬の本草学的研究（第4報）[1]
狼毒について

難波　恒雄[2a]，米田　該典[2b]，故高橋真太郎[2b]

Historical and Herbological Studies on the Traditional Japanese and Chinese Crude Drugs (4)
On the "Lang-tu"

Tsuneo NAMBA[2a], Kaisuke YONEDA[2b] and Shintaro TAKAHASHI (the late)[2b]

Research Institute for Wakan-Yaku, University of Toyama[2a]
and *Faculty of Pharmaceutical Sciences of Osaka University*[2b]

Chinese crude drug "lang-tu 狼毒" is listed in Shen-nung-pen-ts'ao-ching 神農本草経, as the remedy for skin diseases and water intexication.

In chinese and Japanese herbals origin of Lang-tu is not clear before the Sung 宋 dynasty. After the Ming 明 dynasty, it has been common that lang-tu was originated from *Euphorbia sp.*

Nevertheless, present crude drug from China are originated from *Alocasia odora* (Araceae), *Gypsophila oldhamiana* (Caryophyllaceae) and *Euphorbia ebracteolata* and *E. pallasii* (Euphorbiaceae). Lang-tu originated from monocotyledonous plant was not listed in ancient herbals. It was, however, discribed in Chih-wu-ming-shih-t'u-k'ao 植物名実団考 "the rhizome of Tzu-ching-nan-hsing 紫茎南星is applied to lang-tu" it supposed to have been already in Ch'ing 清 dynasty. Caryophyllaceous plants could not be found in any chinese and japanese literatures.

狭毒の基源植物に関して，従来から諸説があり，今日の生薬も *Euphorbia pallasii* TURCZ, *E. ebracteolata* HAYATA (Euphorbiaceae トウダイグサ科) *Stellera chamaejasme* L. (Thymelaeaceae ヂンチョウゲ科)[3] *Alocasia odora* K. KOCH (Araceae サトイモ科)[4], *Gypsophila oldhamiana* MIQ (Caryophyllaceaeナデシコ科)[5] に基づく生薬がある．その薬効に関しては，全てが利水ならびに皮膚病の治療効果があるとされている．このように科属を全く異にしてる基源植物の生薬が，同様の効能を発現することは大いに興味ある問題である．

一方，日本においては，古来からほとんど使用されず，生産されない薬物であったから，中国の本草書の記文をもとに多種の植物を考定するに留めてきた．

筆者らは古来各本草書に収載された狼毒について本草文献的に考察し，さらに基源の異なるものを同一名称のもとに使用されるようになった過程について考証した．

---

* a) 富山大学和漢薬研究所　b) 大阪大学薬学部

1) 前報，薬史学雑誌 **7**, 1 (1972)
本報告は"漢薬・狼毒・大戟の生薬学的研究"（第6報）である．

2) Location: a) *Gofuku, Toyama*
b) *Toneyama, Toyonaka, Osaka*

3) 米田該典，故高橋真太郎，難波恒雄，生薬学雑誌，**28**, 19 (1974)

4) 難波恒雄，米田該典，久保道徳，高橋真太郎，生薬学雑誌，**22**, 115 (1968)

5) 難波恒雄，米田該典，橋本竹二郎，故高橋真太郎，生薬学雑誌 **28**, 27 (1974)

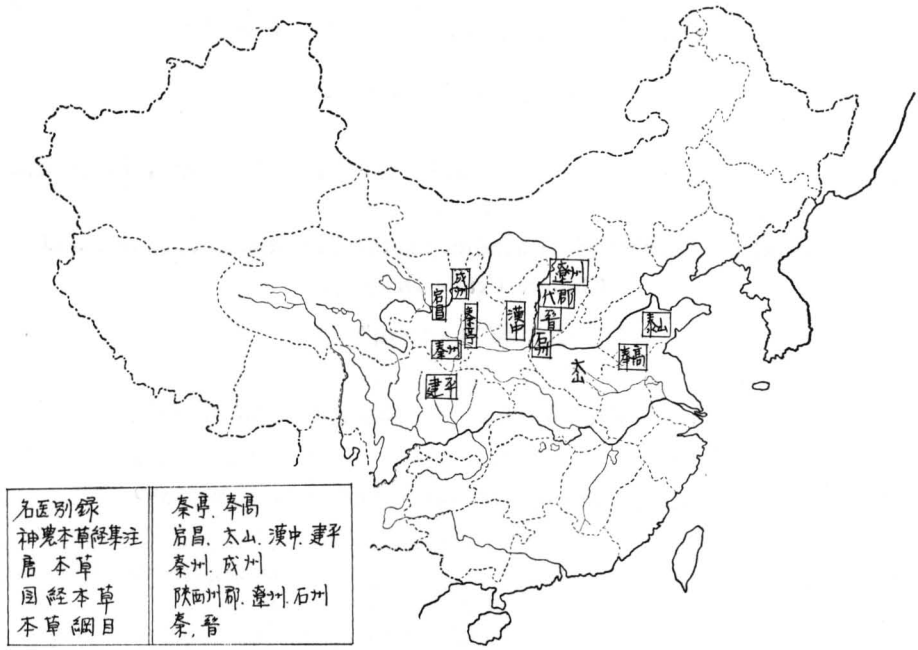


Fig. 1. 本草書に記された狼毒の産地

I. 中国における狼毒

1) 宋代までの狼毒

狼毒の産地に関しては，古くは名医別録[6]に「生秦亭山谷及奉高」と記載され，神農本草経集注[7]にも「出宕昌乃言止有数畝地生蝮蛇含其根故為難得，亦用太山者，今用出漢中及建平」と記され，当時にあっては漢中，建平産のものを用いていた．その後．新修本草[8]では「太山，漢中亦不聞有」と反論し，「今出秦州，成州，秦亭故在二州之界…，奉儷寒地元無蝮蛇復言数畝地生蝮蛇含其根誤也」として陶弘景の説に真向から対立している．新修本草の説は宋代の開宝本草[6]にも引き継がれ，図経本草[6]においても「生秦亭山谷及奉高，今陝西州郡及遼石亦有之」と支持されている．これら秦亭，秦州，成州，宕昌は今の甘粛省[9]にあり，遼州，石州は山西省にある．今日，これらの地から産する狼毒は *S. chamaejasme* を基源とするものである．しかし名医別録，図経本草に記す“奉高”は

Fig. 2. 大 観 本 草

6) 唐慎微，“重修政和経史証類備用本草”人民衛生出版社影印本，北京　1957，狼毒，巻十一，p. 268，防葵，巻八，p. 155
7) 陶弘景，小嶋尚真，森立之重輯“本草経集注”南大阪印刷センター，大阪　1972
8) 蘇敬著，岡血為人重輯“重輯新修本草”国立中国医薬研究所，台北，1964，p. 267
9) 地名考証についてはすべて謝寿昌等“中国古今地名大辞典”商務印書館，上海，1933，および青山定雄“中国歴代地名大要覧”大安影印本，東京1965 によった．

Fig. 3. 本 草 綱 目

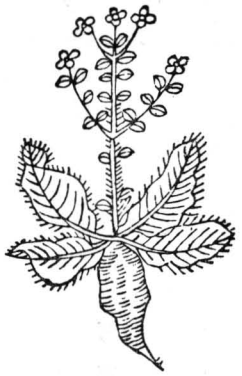


Fig. 4. 国訳本草綱目

現在の山東省にあり，植物分布地理的にみて *S. chamaejasme* は自生しておらず，この地から産する狼毒は既に報告したごとく *E. pallasii*，または *E. ebracteslata*[3] である．

一方，形態についての記事は宋代の開宝本草に「狼毒葉似商陸及大黄，茎葉上有毛，根皮黄，肉白…」とあり，図経本草にはさらに「四月開花，八月結実」と記している．この記文は先の *Stellera sp.* や *Euphorbia sp.* に合致するものであり，証類本草[10]に付された“石州狼毒”の附図 (Fig. 2) も両種を想起させるものである．この石州狼毒について牧野[11]は「*E. pallasii* かも知れない」と指摘したが，謝宗万[12]は「茎がそう生することから Euphorbia spp. とすることは不適当である (原文は中文)」として S. chamaejasme とすべきことを述べている．Euphobia spp. の多くは確かに茎は単一であるが，必らずしもそれは特性でなく，種や，株によっては茎はそう生することから謝宗万の説には同意し難い．むしろ，これらの記文，附図からは今日の生薬の基源である *S. chamaejasme* や *Euphorbia sp.* と断定するのには不充分であり，否定することもできない．しかし，その間にも異種の狼毒は存在していたようで，蜀本草には「根似玄参浮虚者為劣也」と述べている．今日の玄参は *Scrophularia sp.* であり，古くからこのものであろうと考えられることから，このものに似た形態を示すものが用いられていたと思われる．

次に漢中（陝西省），建平（四川省），太山（山東省）に産するものについて考察する．神農本草経集注にはさらに続けて「云与防葵同根類，但置水中沈者便是狼毒，浮者則是防葵」と記し，防葵の頃に建平に産し「云本与狼毒同根」と記すことから，この地に産するものは防葵を指したものであることは明らかである．防葵は神農本草経の上品に収載され，狼毒は下品の薬物であることから，薬効において相違がある，即ち名医別録においては防葵の効にふれて「中火者不可服，令人恍惚見鬼」と記すが，上品の防葵がこのような作用を示すことはなく，狼毒の薬効を記したものであることは明らかである．この点について，本草綱目[13]の防葵の頃においても「是豈上品養性所宜乎，是豈寒而無毒者乎，不然則本経及蘇恭所列者防葵功用，而別録所列者乃似防葵之狼毒功用，非防葵也」と記す通りである．古くは西晋の博物誌[14]にあっても

10) 唐慎微，“経史証類大観本草”光緒甲辰武昌柯氏重校本による
11) 白井光太郎等“頭註国訳本綱目”5冊，春陽堂，東京，1930, p. 503
12) 謝宗万，“中薬材品種論述”上海科学技術出版社，上海，1964, p. 156
13) 李時珍，“本草綱目”人民衛生出版社影印，北京，1957
狼毒，巻 17, p. 722　防葵，巻 17, p. 723
Fig. 3 は京大蔵本
藺茹，巻 17, p. 724　大戟，巻 17, p. 725
金陵本による
14) 張華，“博物誌”台湾中華書局，台北，1967，巻之七

「防葵似狼毒」と記しており，これらの事実から，神農本草経の成立時には明確に区別されていたものが，名医別録成立時には既に混乱しており，両者が混同された．このことは比喩的に各種の書物に引用されている．その後唐代以降の本草書においては明確に区別されていることから，実情は計り難いが，文献上においては明瞭に区別されていたと考えられる．当時の中国産の生薬がもたらされ，正倉院に保存され，今日に伝えられているが，狼毒　防葵は種々薬帳[15]にも載せられ，確かに保存されていたが既に散逸し，実体を知ることができない．

2）明代以降の狼毒

本草品彙精要[16]は石州に産することを記し，本草綱目には秦，晋の地をあげ，古くからの産地と変動がない．

形態について本草綱目は「今人往々以草藭茹為之，誤矣」と記し，藭茹の頃に「狼毒葉似商陸大黄輩，根無漿汁」と記していることから，*Euphorbia* 属植物でないものを狼毒と考えていたのであろうが，これは単に古本草の記文にのみ頼っており，本来の狼毒と別物と考えた藭茹の根をもって狼毒とすることを誤りとしたのであろう．草藭茹は「春初生苗高二三尺，根長大如蘿蔔蔓菁，壮或有岐出者，皮黄赤，肉白色，破之有黄漿汁，茎葉如大刺而葉長微闊，不甚尖，折之有白汁，抱茎有短葉相対，団而出尖，葉中出茎，茎中分二三小枝，二三月開細紫花，結実如豆大，一顆三粒相合，生青熟黒，中有白仁如続随子之状」と記すように明らかに *Euphorbia sp.* をさしたものである．それ故当時，狼毒とされていたものは確かに *Euphorbia sp.* であろう．

他の一種 *S. chamaejasme* を基源とする狼毒は本草綱目の狼毒の頃からは伺えないが，大戟の頃に北方綿大戟として記されるものとよく符合する．綿大戟は本草綱目の附図は北大戟(Fig. 3)と記されるものである．このことは今日の中国において *S. chamaejasme* は西北狼毒[17]と通称されると共に綿大戟とも

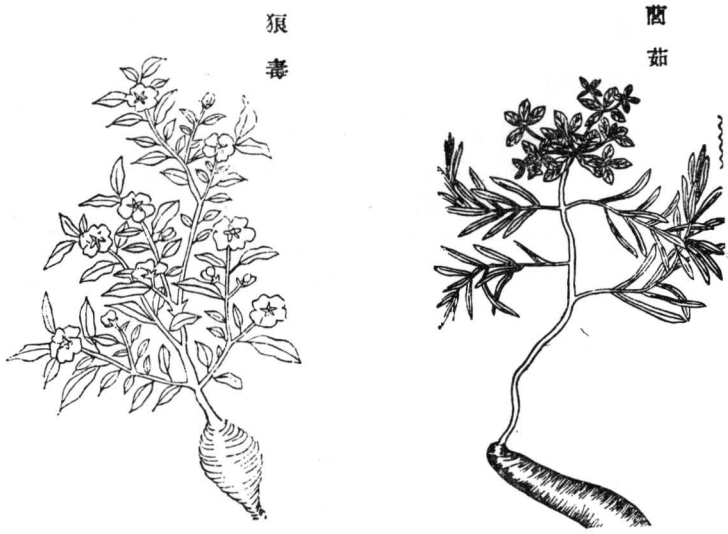


Fig. 5. 植物名実図考

15）朝比奈泰彦等編，“正倉院薬物”便利堂，東京，1955
16）劉文泰，“本草品彙精要”巻 14，中国人民衛生出版社，北京 1964, p. 409
17）中国医学科学院薬物研究所等編“中薬志”第 1 冊，人民衛生出版社，北京，1959, p. 393

呼称されていることからも明らかである．

その後，清代の植物名実図考[18]には狼毒を記して「本草書於狼毒皆不甚晰…，滇南有土瓜狼毒」と記し，別に鶏腸狼毒があることも記している．土瓜狼毒には「以其根大如土瓜，故名」として藺茹の頃に「滇南呼土瓜狼毒」として，藺茹の図 (Fig. 5) もたしかに *Euphorbia sp.* であり，李時珍の説を支持している．なお，現在中国で土瓜狼毒は *E. prolifera* BUCH-HAM. 鶏腸狼毒は *E. esula*[12]と言われている．

しかし，植物名実図考に附された狼毒の図 (Fig. 5) は *Euphorbia* 属植物でなく．むしろ *S. chamaejasme* を描いたもののようである．

さらに，植物名実図考は続けて「今俗紫茎南星根充之」と述べている．南星は *Arisaema sp.* (Araceae) であることは古くからの幾多の考証により明らかであり，紫茎南星も当然 *Arisaema sp.* であろうと考えられる．このことから，清代には全く別の *Arisaema sp.* を基源とする生薬が狼毒とされ使用されていたものと考えられる．やがて紫茎南星と切片の形態がよく似た同じ科の植物が用いられ，数多く自生し，単体から多くの生薬が得られるものが用いられるようになり，結果として，われわれが今日入手し得る *Alocasia odora* を基源とする生薬が用いられるようになったものと推察する．このように *A. odora* を基源とする生薬が用いられるようになったのは比較的新しいものと考えられる．

この他，今日中国から輸入される生薬に，白狼毒と称し *Gypsophila oldhamiana* か，それにきわめて近縁の植物を基源とする生薬があるが，*Gypsophila sp.* を思わせる記文を本草文献中に認めることはできない．それ故，*Gysophila sp.* を基源とする生薬が用いられるようになったのも，さらに近年になってからであると考えられる．

II. 日本における狼毒

最古の記載は正倉院種々薬帳[15]にその名がみられ，既に奈良時代に渡来していたことを証しているが，延喜式[19]には何ら記載がない．しかし，古代中国においてみられた防葵との混乱はなかったようで，正倉院種々薬帳にも狼毒・防葵は全く別物とされている．本草和名[20]においても狼毒は「也末佐久」，房葵は「也末奈須比」とされている．その後，和名類聚抄[21]には狼毒として「也末久佐」の名がみられるが，ヤマクサの名をもつ植物は数多く，現在の日本産の植物の何にあてていたかは不明である．

その後の文献に狼毒に関する記文を認め難いが，江戸時代の多識編[22]には狼毒の和名として「夜未久佐」の他に「仁波夜奈岐」をあげている．ニワヤナギは萹蓄のことであり．同じ多識編の萹蓄の頃に和名「仁波也那岐」とある．同様の取扱かいは薬種名寄帳[23]，薬品手引草[24]にも認められる．その後，日用薬品考[25]には「…今薬舗ニ狼毒ト称シテ萹蓄ノ茎葉ヲ售モノアリ甚非ナリ」とあり，訂正されてはいるが，比較的古くから相当広く誤用されていた．

わが国における狼毒は古代から全て輸入に頼っており，用薬須知後編[26]には「漢渡正徳年中マテ来ル，近コロ絶ヘテ来タラス，用モマタ稀ナリ」とあり，1710 年代までは輸入されていたようである．さらに続けて「此物毒ナシ，綱目狼毒ノ字ニ因テ毒草ト思ヘ

18) 呉其濬“植物名実図考”中華書局，北京，1963
狼毒　巻二十四，毒草類　p. 594
藺茹　巻二十四，毒草類　p. 596
19) 藤原忠平等撰“延喜式”巻 37 典薬寮，〔国史大系，26 国史大系刊行会，東京，1938，p. 815〕
20) 深江輔仁“本草和名”寛政版 (1797) 和泉屋庄次郎刊
21) 源順“倭名類聚抄”金国書房，1943
22) 林羅山“新刊多識編”毒草部 4，文化書房博文社，東京，1973〔早大本寛永板〕
23) 本郷正豊“薬種名寄帳”吉文字屋蔵版，天明三年 (1983)
24) 加地井高茂“薬品手引草”摂陽書舗，安永七年 (1978)
25) 水谷豊文“日用薬品考”尾張東壁堂蔵版，尾張，文化七年 (1810)
26) 松岡玄達“用薬須知後編”巻の I，平安書舗宝暦九年 (1759)

リ」とあることから，このものは *Stellera, Euqhorbia* 属のものではないと思われるが，その後の文章中に「和産是ニ当ヘキモノ二種アリ一ハ俗ニ牡丹人参．一名木防風ト云モノ即チ弘景説クモノ是ナリ，一ハ俗ニ土大黄ト呼フ者即チ馬志説ク所ノ者是ナリ」としており，本草綱目啓蒙[27]には防葵の頃ニ和名としてボタンニンジン，キボウフウ等を挙げている．当時牡丹人参は嫩根を用いて和人参と称して売ったり，老根を防風と称していたことから明らかに松岡玄達のいう一種狼毒はボタンボウフウのことであろう．また土大黄は *Rumex* 属植物であろうが，これは本草書記載の形態から類推したものであり，それまで日本においてほとんど認められなかた防葵との混乱が突然みられたことは，松岡玄達自身が狼毒の本体について知らず，単に古本草の記文にとらわれ，文献上の考察を加えただけのものであろうと思われる．また，小野蘭山は「和産イマタ詳ナラス，古ハ漢渡アリ今ハ渡ラス，薬肆ニ持伝ルモノアリテ本手ノ羌活ノコトク疙瘩多シ肉ハ白色，然レトモ古物ニシテ蛀多シ」と述べており，この記文から推察すると，古く渡来したものは *Euphorbia sp.* を基源とする生薬で，今日の安徽省産，東北産の狼毒の類であろう．さらに享保の頃に「生根享保年間ニ唐山ヨリ来ル．ソノ時ハ狼毒名ケテ渡ス唐山ニテ藺茹ヲ誤テ狼毒トヨブコト集解時珍説ニ弁セリ」とある．この漢種の藺茹について詳細に伝えたのは平賀源内で，物類品隲[28]の藺茹の頃にも形態を記し

Fig. 6. 物 類 品 隲

「和産ナシ，漢種享保年中種ヲ伝ヘテ今官園ニアリ，此物漢土ヨリ渡ス時狼毒ト称ス，漢人誤リ来ルコト久シ」とあり，享保年間にわが国に伝えられたことは小石川御薬園の記録[29]に「享保十二年長崎ヨリ」として狼毒の名があることより確かである．その狼毒は藺茹であり，物類品隲の併図 (Fig. 6) からもたしかに *Euphorbia* 属植物を表わしたものである．

一方，別の一種狼毒 *S. chamaejasme* は本草綱目に記すように綿大戟とされ，古方薬品考[30]には「舶来有綿大戟，紫大戟二種…」と記され，他の本草書中にも同様の記文があることから，大戟の一種として輸入されていたようである．

なお，岩崎灌園[31]は本草図譜の狼毒の頃に「形状狼毒に近因テ茲ニ載スル」としてヨーロッパ産のマンドラゴラの名があり，大沼により *Mandragora officinalis L.* ニンギョウナスビと考定されている．

これは植物学的形状，毒性の点で仲々興味ある見解であるが，本草学的，植物地理学的

27) 小野蘭山口授，小野蕙畝録，井口楽三訂“重訂本草綱目啓蒙”岸和田邸学蔵版，巻 13, 1847
狼毒 水 13, 2 七
防葵 谷 13, 3 化
28) 平賀源内“物類品隲”巻中三，草部〔日本古典全集，物類品隲，日本古典全集刊行会，東京，1928, p62., p. 131〕
29) 上田三平“日本薬園史の研究”三浦三郎編，改訂増補，渡辺書店，東京，1971
30) 内藤尚賢“古方薬品考”文泉堂，京都，天保十二年 (1841) 二十
31) 岩崎灌園“本草図譜”毒草部十八，本草図譜刊行会，東京，1922,

TABLE 1. 近代の文献にゆられる狼毒の基源

Smith[32]	*Aconitum lycoctonum*
Stuart[33]	*A. lycoctonum*, *A. ferox*, *Ranunculus sp*
於達望[37]	*A. lycoctonum*
中尾，木村[34]	*Euphorbia adenochlora* (?)
石戸谷[35]	*E. pallasii*
牧野[11]	*E. fischeriana* (=*E. pallasii*)
木村，木島，丹[36]	*E. pallasii*, *E. ebracteolata*
佐藤[37]	*E. fischeriana*
中華人民共和国薬典[38]	*E. fischeriana E. fischeriana*, *S. chamaejasme*
中薬志[17]	*E. fischeriana*, *E. sieboldiana*, *S. chamaejasme*
薬材学[39]	*E. fischeriana*, *E. sieboldiana*, *S. chamaejasme A. lycoctonum*
中国薬用植物誌[40]	*E. sieboldiana*, *S. chamaejasme*, *A. lycoctonum*
謝宗万[12]	*S. chamaejasme*, *E. fischeriana*, *E. sieboldiana E. fischeriana* var. *pilosa*, *E. nematocypha*, *E. rothiana*, *E. esula*, *E. wallichii*, *E. prolifera*, *Alocasia odora*, *Amorphophalus rivieri var. konjac*, *Sedum sinicum*, *Geranium sinense*, *Boenninghausenia albiflora*, *Cynanchum chinense*, *Typhonium giganteum*, *A. lycoctonum*

には明らかに誤りである．

近代から現代の狼毒考

近代の文献で狼毒の原植物として報告され，記載された植物を整理すると TABLE 1 の如くである．これらの多くは単に学名を記すのみで，生薬学的見地からの考察は何らなされていない．

III. 狼毒を用いた処方

狼毒は古来，余り用いられなかった薬物で，神農本草経[41]には「主欬逆上気，破積聚，飲食，寒熱，水気，悪瘡，鼠瘻，疽蝕，鬼精，蠱毒」と記され，名医別録に「脅下積癖」と述べられて以来，その後の本草書はこれらの記文を受け継いでいるのみである．

その利用も，単味の処方として狼毒散方[42]を乾癬に用い，秦艽と配合[42]して悪瘡の風瘡に用いている．また，九痛丸[43]は心痛，腹痛等に用いるが，肘後方[44]には同様の鎮痛効果を目的とした処方が数例認められる．このような処方効果は神農本草経にいう効能とよく一致する．しかし，抱朴子[45]には野葛と合して聾を治すという記事がみられる．野葛は *Gersemium elegans* BENTH (*Loganiaceae*) を基源とするもので，狼毒同様毒性の強いも

32) Smith, "Materia medica & Natural history of China" American pressbyterian mission press, 1871
33) G. A. Stuart, "Chinese Materia Medica" American press byterian mission press Shanghai 1911
34) 中尾万三，木村康一 "漢薬写真集成 I" 上海自然科学研究所，上海，1929, p. 84
35) T. Ishidoya (石戸谷勉) "Chinesicshe Drogen II pharmakologischen Institut der Kaiserischen Universität Zu Keijo, 1934
36) 木村康一，木島正夫，丹信実，"和漢薬名彙" 広川書店，東京，1964, p. 43
37) 佐藤潤平，"漢薬の原植物"，学術振興会，東京，1959, p. 2214
38) 中華人民共和国衛生部薬典委員会編 "中華人民共和国薬典 1963 年版，第 1 部" 人民衛生部出版社，北京，1964
39) 徐国鈞他編，"薬材学" 人民衛生出版社，北京，1961
40) 裴鑑，周太炎，"中国薬用植物誌" 第 6 冊，科学出版社，北京，1958
41) 魏呉晋等述，清孫星衍，孫馮翼輯 "神農本草経" 商務印書館，上海．1955, p. 110
42) 宋王懐隠等編，"太平聖恵方" 人民衛生出版社，北京，1959, p. 656, p. 2009
43) 太平恵民和剤局編，"太平恵民和剤局方" 人民衛生出版社，北京，1959
44) 葛洪撰，"葛洪肘後備急方" 商務印書館，上海，1955, p. 103, 106, 172
45) 葛洪，"抱朴子" 〔18) p. 594 文引用〕

のであり，何故このような効果を期待したかは明らかでない．

その後，新しい処方はほとんど認められず，今日中国においても余り用いていないが，これは，古くから原植物が混乱していて，本来の効能，定効を期待できなかったことと共に，毒性が強い為であったと考えられる．その結果，植物名実図考に「方家亦憚用之」と記すように医家自身が使用しなくなっていたのであろう．ただ，清代において中国南部においては狼毒として紫茎南星というものを用いたことが記されているが，南星は日華子本草[6]に「主蠱毒疥癬悪瘡」と記され，本草綱目にも記されている．このような効能の近似と共に毒性が強く，狼毒の基源植物とされる *S. chamaejasme* や *Euphorbia spp.* が南部に分布しないことから．南星の一種であろう *Arisaema sp.* を基源とする生薬が用いられていたのかも知れない．その結果，今日得られる *Alocasiao dora* を基源とする狼毒があるのであろう．

近年，中国においては「狼毒棗」として，狼毒を主薬とする処方を臨床に用い，腺結核に有効なることを認めたことを報告している[46]．この狼毒は，東北狼毒であるとされているが，恐らく *E. pallasii* を基源とするものであろう．

結　論

以上のように狼毒は古来，中国各地で多種類のものが用いられていたが，宋代以前のものは明確さを欠いている．明代以降の狼毒は一種は *Euphorbia sp.* を基源とするもので，本来藺茹とされるものであり，現在の生薬からも伺い知ることができる．他に西北狼毒とされる *S. chamaejasme* は綿大戟として大戟の一種とされているが，清代においては綿大戟は狼毒と同一視されるようになった．他に *Arisaema sp.* も狼毒とされるようになったが，その後，*A. odora* が用いられるようになり，今日得られるような広東産狼毒の利用が行なわれるのは清代以降のことである．

一方，日本における狼毒は従来生産されず漢方医家自身も余り使用しなかったことから，日本の本草家は輸入される生薬について考察を加えるのみであって明確さを欠いている．

謝　辞

本研究にあたり，文献の閲覧を許可された京都大学薬学部木島正夫教授，武田薬品工業KK，宮下三郎博士，国立国会図書館の諸氏，また種々御助言を頂きました名城大学薬学部木村康一教授に深謝する．

46) 楊永清，中医雑誌 **6**, 365 (1956)

和漢薬の本草学的研究（第5報）[1]
大戟について

難波　恒雄[2a]，米田　該典[2b]，故高橋真太郎[2b]

Historical and Herbological Studies on the Traditional Japanese and Chinese Crude Drugs (5)
On the "Ta-chi"

Tsuneo NAMBA[2a], Kaisuke YONEDA[2b] and Shintaro TAKAHASHI (the late)[2b]

Research Institute for Wakan-Yaku, University of Toyama[2a]
and *Faculty of Pharmaceutical Sciences of Osaka University*[2b]

Chinese crude drug "Ta-chi 大戟" is listed in Shen-nung-pen-ts'ao-ching 神農本草経 as the remedy for skin diseases, celiodynia and stomachalgia.

Considering the descriptions in the chinese and Japanese herbals, the origin of Ta-chi is regarded as *Euphorbia pekinensis* RUPR. (Euphorbiaceae). Present crude drug from Japan has been confirmed as the root of this plant. But the origin of Hung-ya-ta-chi 紅芽大戟 from China is belong to Rubiaceous plant. Rubiaceous plant could not be found in any chinese and Japanese herbals. Another chinese Ta-chi on present market, Mien-ta-chi 綿大戟 is listed in Pen-ts'ao-kang-mu 本草綱目 as Pei-ta-chi 北大戟 and this is originated from *Stellera chamaejasme* L. (Thymelaeaceae)

* a) 富山大学和漢薬研究所，b) 大阪大学薬学部

1) 前報，薬史学雑誌，**9**, 1 (1974)
本報告は"漢薬狼毒・大戟の生薬学的研究（第7報）"である．

2) Location: a) *Gofuku, Toyama*
b) *Toneyama, Toyonaka, Osaka*

3) 魏呉晋等述，清孫星衍，孫馮翼輯，"神農本草経"商務印書館．上海，1955, p. 110

4) 李時珍，"本草綱目"人民衛生出版社影印，北京，1957, p. 725

5) 郭璞：爾雅注"〔呉其濬，"植物名実図考長編"，商務印書館，上海，1959, p. 775

6) 深江輔仁"本草和名"，寛政版，和泉屋庄次郎刊　1597

7) 小野蘭山口授，小野憲猷録，井口楽三重訂"重訂本草綱目啓蒙"岸和邸学蔵版，巻之十三

8) 中国医学院薬物研究所等編"中薬志Ⅰ"人民衛生出版社．北京，1961, p. 37

9) 南京薬学院薬材学教研組編，"薬材学"人民衛生出版社，北京．1961, p. 580

10) 中華人民共和国衛生部薬典委員会編"中華人民共和国薬典 1963 年版第1部"人民衛生出版社．北京，1964

大戟は今日希用の生薬であるが，神農本草経[3]以来，歴代の本草書に常に収載されており，古くから絶えることなく用いられたことを示している．

名義について李時珍[4]は「其根辛苦戟人咽喉故名」と釈しており，さらに「今俚人呼為下馬仙，言利人甚速也」といっている．古来から異名が多く卬鉅（神農本草経[3]）蕎（爾雅[5]）などの名もみられる．　また本草和名[6]においては脯薬，沢括，標，明畎，秦茯，僑，沢蛄，大帛と記し，本草綱目啓蒙[7]には破軍殺（輟耕録），勒馬宜（古今医統）をあげている．

今日の生薬についても，中国では草大戟，綿大戟，京大戟，唐大戟，紅芽大戟[8)~10)]をあげている．これらは商品上大戟に含まれるが，その実，基源を異にする商品の各種について名付けられた名称である．しかし，これ

形態と撰品

	大　戟	澤　漆
名医別録	十二月採根　陰乾	大戟苗也　生川澤　三月三日 七月七日採根葉
本草経集注		此是大戟苗也　生時摘葉有白汁
蜀本草	図経云 苗似甘遂高大 葉有白汁 花黄 根似細辛参 皮黄黒肉黄白 五月採苗 二月八月採根用	
図経本草	澤漆根也　春生紅芽 漸長作叢 高一尺已未葉似初生楊柳小圓 三月四月開黄紫花 圓圓似杏花 又似蕪荑 根似細辛参 皮黄黒、肉黄白色　秋冬採根 陰乾 淮甸出者 茎圓高三四尺 花黄茎至心亦如百合苗 江南生者 葉似芍薬	大戟苗也　生泰山川澤 生時摘葉有白汁出
救荒本草		大戟苗也　今處々有之 苗高二三尺 科又生茎紫赤色 葉似柳葉微細短 開黄紫花 狀似杏花而蕊頗長 生時摘葉有白汁出
本草綱目	生平澤甚多 直茎高二三尺 中空折之有白漿 葉長狹如柳葉而不圓 其梢葉密攢面上 杭州紫大戟美上 江南土大戟次之 北方線大戟色白 其皮柔韌如綿 甚峻利 能傷人 弱者服之 或至吐血 不可不知	今考土宿本草及宝蔵論諸書並云 澤漆是猫児眼睛草 江湖京澤平陸多有之 春生苗一科分枝成叢 茎如馬齒莧 緑葉如苜蓿草 葉圓而黄緑 頗似猫睛 故名猫児眼 茎頭凡五葉中分 中抽小茎五枝 每枝開細花 青緑色 復有小葉承之 齊整如一 故名五鳳草 緑葉緑花草 梢茎有白汁黏人 其根白色 有硬骨 或以此為大戟苗者誤也

らの多くの名称は大戟にのみ付されたものでなく，他のものに付されたものもあり，かなり混乱している．さらにその時々のものが何物をさしたかは不明であるので，中国，日本の本草書から基源の歴史的変遷を考察した．

中国における大戟

大戟の基源植物の形状に関する記載は蜀本草[11]に始まる．その後宋代の図経本草[11]には大戟を記して「大戟沢漆根也」と記している．この説は宋代に始らず，既に名医別録[12]の沢漆の頃に「…一名漆茎，大戟苗也」とし，薬物としては大戟が地下部を用い，沢漆は地上部を用いる別の薬物であるが，植物は同一物であるとしている．神農本草経集注[12]，図経本草，救荒本草[13]と受け継がれたこの説は，その後明代に到り，大戟と沢漆とは植物としても別物であるとし，この李時珍の説は現代にまで受け継がれている．

歴代の本草書から形状，産地などについて大戟と沢漆とを対比するとTABLE 1のごとくである．これを綜合すると大戟は“葉形は初生には楊柳に似て小さく丸い．花は黄紫色，開花期は4～5日で．草文は30～60 cm，茎葉などを折れば白汁が出るもの”であることから Euphorbiaceae トウダイグサ科の *Euphorbia* 属植物を指したものであると推定できる．確かに大観本草，[14]，政和本草[11]，紹興本草[15]の滁州大戟，并州大戟* の図，冀

11) 唐慎微“重修政重経史証類備用本草”巻十，人民衛生出版訂影印本，北京．1957, p. 256
12) 陶弘景，小嶋尚真，森立之重輯“本草経集注巻之五，南大阪印刷センター，大阪，1972, p. 78
13) 朱橚編輯，“救荒本草”明嘉靖4年(1586年)刊本
14) 唐慎微，“経史証類大観本草”
15) 唐慎微，“紹興校定経史証類備急本草”春陽堂，東京，a) 白井本，1933. b) 竜谷大本，1973. 共に画巻之三
* 竜谷大本の紹興本草[15b]には荆州大戟と記し，他は全て並州大戟と記す，それ故并州大戟とした．

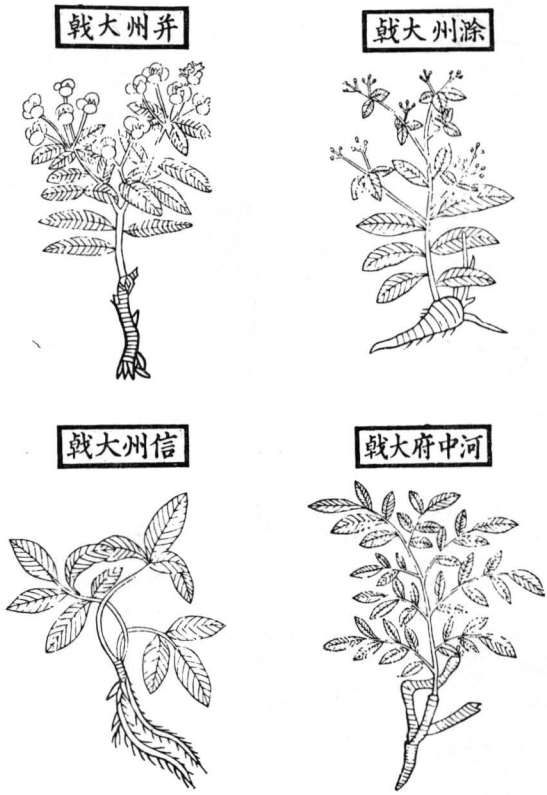


Fig. 1. 大 観 本 草

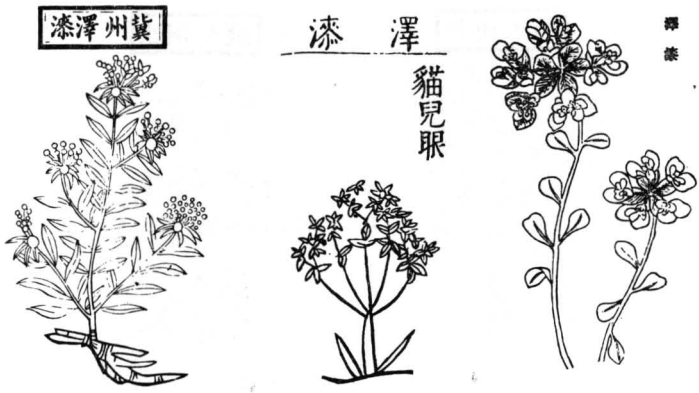
州沢漆の附図 (Fig. 1, 2) もこれを裏書きしている．また，その産地[16]は常山（今日の浙江省）を主とし，滁州（安徽省）并州（河南省）であり，沢漆は泰山（山東省）冀州（河南～河北省）鼎州（湖南省）明州（浙江省）である．これらの地区に分布する *Euphorbia spp.* のうち根茎が肥大するものには幾種かある[17]が，并州大戟の図は根茎が茎と直線的に続くことから Sect. *Tithymalus*. subsect. *Verticillatae* か，または，Subsect. *Gallarrhoei*. ser. *pekinensis* に含まれるものである[18]．このうち先の地区に分布するものは *E. sampsonii, E. jolkinii, E. pekinensis* の3種のみであるが，*E. jolkinii* は海岸に特産し，分布が限られ，皮が黄黒色であり，肉が黄白色を呈するものは *E. pekinensis* のみであることから，本草書に記す正品の大戟は *E. pekinensis* である．一方滁州大戟の図は茎と根茎が直角に，即ち根茎が水平方向に伸長する．この特徴をもつものは Sect. *Tithymalus*. subsect. *Esulae* と Sect. *Gallarhoei* ser, *Laevicarpae* であるが，根茎の肥大するものは Sect. *Gallarhsei* である．分布地理的にみて滁州大戟に合致するものは *E. ebracteolata* HAYATA である．

この他にも，図経本草には形態の異なるものの存在を記し，淮甸（浙江省南部）に産するものと江南（江蘇省南部）に産するものをあげているが，このものが何を指したものであるかは不詳である．ただ，証類本草には前記以外に河中府大戟，信州大戟の図が付され

16) 産地の地名考証はすべて謝寿昌等編“中国古今地名大弁典”商務印書館，上海，1933，および青山定雄“中国歴代地方大要覧”大安影印本，東京，1965 によった．

17) Isao HURUSAWA, Journal of the faculty of Sciences, University of Tokyo, Section III, Botany, Vol. VI, part. 6. Tokyo University, Tokyo 1954 p. 224

18) 古沢[17] はこれらを Euphorbia sp. とせず Galarhoeus sp. としているが，著者らは Euphorbia を採用する．



大観本草　　本草綱目　　植物名実図考

Fig. 2.

本草綱目　　植物名実図考

Fig. 3.

ており，信州大戟は図経本草に言う江南に産し「葉似芍薬」のものと同一物と思われ，また本草綱目の南大戟 (Fig. 3) と一致しているが，何物を指したかは不詳である．河中府大戟は Leguminosae マメ科の植物のようである．今日，中国では *Indigofera sp.* または *Lespedez sp.* を基源とする草大戟がある[19]ことを記している．しかもこれらは安徽省を中心に山西省にも産出している．河中府は現在の山西省であることから，証類本草に記す河中府大戟はマメ科植物を基源とするものであろう．

その後，明代に到り，本草綱目では新たに北方綿大戟として繊維に富む一種の大戟があることを記している．このものは附図の北大戟 (Fig. 3)．その後の本草彙言[20]などの記文から，本来狼毒と称すべきものであり，Thymelaeaceae ジンチョウゲ科の *Stellera chamajasme* L. と推察できる．今日，中国において *S. chamaejasme* を基源とする綿大戟がある．しかし，清代の植物名実図考[21]において正品とされる大戟は *E. pekinensis* に基づくものであり，時代の変遷と共に変ることなく *E. pekinensis* が正品として用いられていた．

今日の市場生薬をみるとき，大戟の大部分は紅芽大戟（唐大戟）と通称される生薬であ

19) 謝宗万，“中薬材品種論述”上冊，上海科学技術出版社，上海 1964, p. 148
20) 倪朱謨“本草彙言”巻之五，清光緒間刊本
21) 呉其濬，“植物名実図考”商務印書館，上海．1957, p. 597

Fig. 4. 本 草 原 始

るが，この大戟は *Euphorbia sp.* に基づくものではなく，Rubiaceae アカネ科の植物に基づくものであろう[22]．中国ではこの生薬はアカネ科の *Knoxia corymbosa* WILLD.[8)9)] または *K. valerianoides* THOREL. *K. congesta* PITARD.[9)]等を基源とするとしている，このものは外面が紫かっ色で，断面は赤かっ色で本草綱目の紫大戟や，本草原始[23]に言う紅芽大戟を思わせるものである．この点について薬材学[9)]では，この種の大戟を本草綱目に言う紫大戟と論じているが，綱目中には紫大戟は杭州に産するとされ，杭州は今日の浙江省にある，しかるに，今日の紅芽大戟は広東，広西，雲南等の南部地区に産し，浙江省に産しない．このことから，本草綱目の紫大戟が今日の紅芽大戟と同一物とは考えられない．やはり *Euphorbia sp.* を基源とするものであろう．また本草原始の図 (Fig. 4) は *Euphorbia sp.* を表わしたものと考えるのが妥当であろう．かつて名称として近いもの，同一のものがあったが今日の紅芽大戟とは無関係であると思われる．この種の大戟がいつの頃から中国において用いられだしたかは，なお不明であるが，既に 1934 年中尾万三，木村康一先生が上海からわが国にもたらした標本は今日の紅芽大戟と同一物である．

一方，大戟と沢漆は明代以降，明らかに別種の植物を基源とするとされている．牧野[24]は本草綱目の記文から *E. helioscopia* L. とあてたが，その記載ならびに附図 (Fig. 2) から妥当であると考える．*E. helioscopia* は根茎が細く，*Euphorbia spp.* 中においても全く形態を異にするものであり[25]，本種の根が大戟とされ用いられたとは考えられない．それ故，宋代までの諸本草に記す沢漆と，明代以降のものとは明らかに異なるものである．

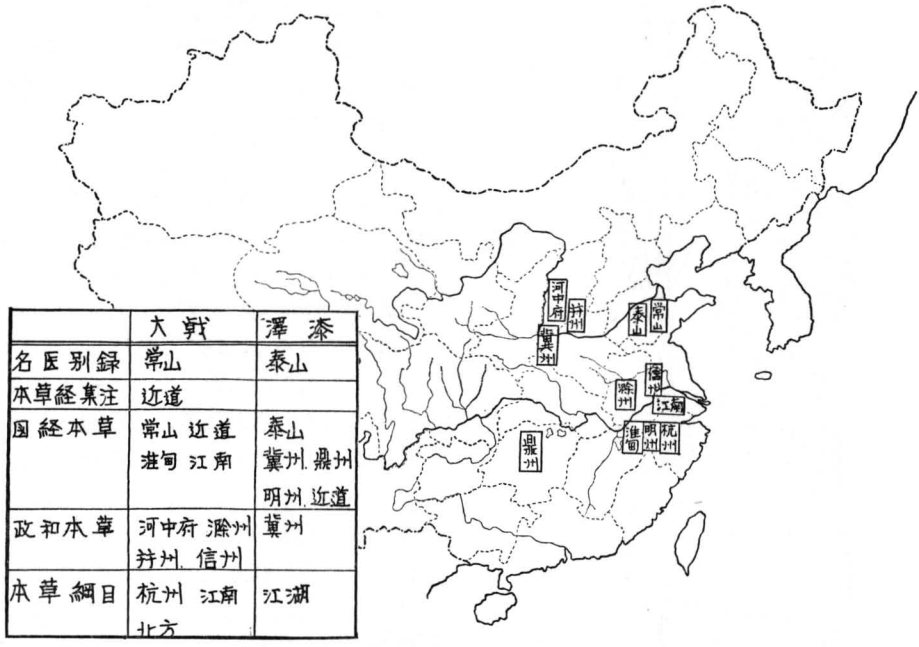
今日，沢漆は市場性がないので確認すべくもないが，本草書にみる限りにおいて宋代の沢漆は *E. pekinensis* であり，明代以降のものは *E. helioscopia* である．

日本における大戟

日本においても古くから薬用に供され，延喜式[26]の諸国進年料雑薬に「大和，伊勢，尾張，下総，常陸，近江，美作，備前，阿波，讃岐，伊予」の 11 ケ国から相当多く貢進されていることから，わが国においても広く産出されていることが知れる．

新撰字鏡[27]に「大戟，念毘須，一云波良草」とあり，本草和名[6]には前記の異名と共に「和名波也比止久佐」とある．倭名類聚抄[28]にも「大戟和名波夜比止久佐と」記し，延喜式にも和名考異に「波夜比止久佐，比々

22) 米田該典，故高橋真太郎，難波恒雄，生薬学雑誌，**28**, 15 (1974)
23) 李中立輯，“本草原始” 清順治乙酉(1645 年)刊本
24) 白井光太郎鑑修，“頭註国訳本草綱目” 5 冊，春陽堂刊，東京，1930, p. 519
25) 古沢潔夫，植物研，**16**, 633 (1940)
26) 藤原忠平等撰，“延喜式” 巻三十七（国史大系，26，国史大系刊行会，東京，1938, p. 815，和名考異は p. 1012)
27) 細川潤次郎等編，“古事類苑” 古事類苑刊行会，東京，1935, p. 333
28) 源順，“和名類聚抄” 金国書房，大阪，1943



	大戟	澤漆
名医別録	常山	泰山
本草経集注	近道	
国経本草	常山 近道 淮甸 江南	泰山 冀州 鼎州 明州 近道
政和本草	河中府 滁州 并州 信州	冀州
本草綱目	杭州 江南 北方	江湖

Fig. 5. 本草書に記された大戟・沢漆の産地

良岐，大比々良支」とあるが，形態については何ら記していないので，当時のものが何物であったか不明であるし，その語源も不明である．

また，当時わが国は中国文化導入期であったので，本草記事をそのまま受入れており，大戟と沢漆について，新撰字鏡には「沢漆，大戟苗，生時波衣草苗」本草和名には「沢漆和名波也比止久佐乃女」と記している．

その後江戸時代に入り，本草綱目の影響をそのまま受入れ，多識編[29]では「大戟，波未比登久佐」，「沢漆，乃宇流之」として，両者を区別している．

江戸期における主な本草文献中に記される大戟の和名は，

多識編	1612	波夜比止久佐
本草和解[30]	1712	波未比登久左
和漢三歳図会[31]	1713	ハマヒトクサ
薬種名寄帳[32]	1715	波未比登久佐
用薬須知[33]	1726	野漆（ノウルシ）
物類品隲[34]	1763	ノウルシ，キツネノチチ（伏見方言）タカトウダイ（江戸方言）
日用薬品考[35]	1811	ハマヒトクサ，イワタイゲキ，タカトウダイ
本草図譜[36]	1816	ハヤヒトクサ，シカトビ大戟，タカトウダイ
有毒草木図説[37]	1827	タカトウダイ
古方薬品考[38]	1841	ハマヒトクサ，タカ

29) 林羅山“新刊多識編”巻二，文化書房，博文社，東京，1973
30) 大江広泉，“本草和解”，摂陽堂刊，大阪，1712 巻の 5，p. 9
31) 寺島良安“和漢三才図会”吉川弘文館，東京，1906，p. 1351
32) 本郷正豊，“薬種名寄帳”和田窓旭堂，京都，1783 刊 41ウ
33) 松岡玄達“用薬須知”平安書舗，京都，1726，18
34) 平賀源内，“物類品隲”〔日本古典全集，日本古典全集刊行会，東京，1927，p. 63〕
35) 水谷豊文，“日用薬品考”東壁書荘，尾張，1811，46～47
36) 岩崎常正，“本草図譜”巻 18，本草図譜刊行会，東京，1922，p. 14
37) 深田正韻等“有毒草本図説”東壁堂，尾張，1827，七
38) 内藤尚賢，“古方藤品考”文泉堂，京都，1841，二十～二十二

トウダイ，

本草綱目啓蒙[7] 1847 タカトウダイ

とある．今日，これらのうちタカトウダイ，ノウルシは生語であって，*E. pekinensis.* と *E. adenochlora* HAYATA を指したものである．

しかし，江戸期には漢種，和種の二様があった．当時の日本の本草家は日本にもたらされる中国産大戟について，次の如く記している．

本草弁疑[39]：唐アリ和アリ，中略，今綿大戟間渡ス之ヲ用ユヘカラス，外ニ元ヨリ渡ル者アリ紫大戟，土大戟ノ分ヲ知ラス…中略，唐ハ根ノ色紫ニ薄黒ク重シ之ヲ削レハ内紫ニ中心空ナラス

日用薬品考[35]：古渡ニ綿大戟，紫大戟ノ真ナルモノアリト云トモ今希ナリ．中略，今薬舗ニ唐の大戟ト称スルモノハ皆佗ノ薬中ヨリ択出ス外面紫赤色裏面淡褐色細長ニシテ多ハ皮ノミナリ，味微渋アリテ薨カラス是真ニアラス

古方薬品考[38]：舶来有綿大戟，紫大戟二種，其綿大戟為上品形如苦参而細桑靱皮紫黒肉茶褐色味苦辛者為真，薬舗所販者是唐黄芩或白鮮皮中混来者多偽雑，今載来者唯紫大戟一種耳形細長七八寸紫赤色味微苦者不堪用又有享保中，所伝之漢種

とある．

これらの記事から当時輸入されていたものは紫大戟のみのようで，綿大戟は他の薬材中に混じって入っていたことが知れる．さらに当時，漢種の大戟の生品は中国からもたらされ栽培されていた．本草綱目啓蒙には「享保年間ニ渡ル，春宿根ヨリ苗ヲ叢生ス，円茎高サ四五尺，葉ハ草藺茹ヨリ狭細ナル色深緑．微黒ニシテ中道白シ，葉ヲ断テバ白汁ヲ出ス．夏ニ入テ茎梢及葉間ニ小枝ヲ抽テ花ヲ開キ実ヲ結フ，形状草藺茹ニ同シテ小ナリ，只花下ノ葉黄色ニ変セス，秋深テ苗枯ル」と記しているが，これは確かに *E. pekinensis* タカトウダイの形状を示したものである．

次に日本産の市販大戟については各地から各種のものが産出されて，和漢三歳図会には「和州金剛山之産名小大戟，丹波伊予次之」と記し，紀州，土州，山城，伏見，京小倉から産したことが知れる．その後本草図譜には筑前，淡路，土佐，紀州，幡州から岩大戟，武州多摩郡からしかとび大戟が産し，タカトウダイと呼ぶものが全国の陽地にあるとしている．このものの形態について，本草和解には「春苗ヲ生ジ，高サ一，二尺中空ニシテ折ハ白氷アリ，葉ハ長ク狭クシテ柳ノ如シ，三四月黄紫花ヲ開ク杏花ニ似タリ，二八月ニ根ヲトル苦参状ニ似テ皮黄ニ肉ハ黄白ナリ，但シ紫色赤色ナルヲ良トス，色白ク綿ノ如く軟ナルハ人ヲシテ吐血セシム」とある．この記文から，当時の大戟のうち根の紫赤色なるものは *E. pekinensis* である．また根の白色なるものは *E. adenochlora* であろう．このように二種のものがあり，区別されていたと推定されるが，日用薬品考に「別ニ伏見大戟ト呼モノアリコレハ草藺茹ニシテ大戟ニアラス」と述べ，本草綱目啓蒙にも「ノウルシヲ伏見ノ大戟ト称シテ売モノアリ，コレハ草藺茹ニシテ大戟ニアラサレトモ薨味アリテ相違カラサルモノ故．野苧麻根ノ偽ヲ用ルニハマサルヘシ」と記しており，混乱していたことが判る．草藺茹については，物類品隲に「此物湿地ニ生ス，状大戟，甘遂ニ似テ大ナリ，春未黄花ヲ開ク，根藺茹ニ似テ小ニシテ色白シ」と記している．藺茹は漢種として当時伝えられた生根があり，記文，附図から *E. ebracteolata* であろう*．しかし，本草図譜[36]に記された草藺茹の図は明らかに *E. adenochlora* である．ところで，本草綱目啓蒙に記された野苧麻根との誤用について相当広く用いられていたようで，本草弁疑[39]に「和ノ苧麻根ハ大ニ誤リ也」と記されて以来，日用薬品考にも記されているが，古方薬品考には「又旧説以野苧麻(ノ)根(ヲ)質(スト)云，今否(ス)」と記していることから 19 世紀の初期にはこの誤りは正されていたようである．その他日用薬品考には「アカソノ根，蕘花

39) 遠藤元理，“本草辨疑”漢方文献刊行会，大阪，1971, p. 159

* 詳細は前報[1]に述べた．

根，李根皮，等ヲ謬リ售モノアリ」と記すように贋偽生薬が多種あったようであるが，今日，これらのものは何ら残されていないことから，確認すべくもないが，一時代にはこのような誤用もあったのであろう．

大戟を用いた処方

大戟の薬効として神農本草経に「主蠱毒十二水腹満急痛積聚中風皮膚疼痛吐逆」として記されて以来，主として泻水薬，皮膚病薬としての効果を期待して，歴代の本草書に伝えられた．

大戟を配した処方は多くはない．先の泻水の目的で配した処方には傷寒論[40]に十棗湯がある．十棗湯は別に朱雀湯と称し，主剤は大棗であるが，薬効上は大戟ならびに芫花，甘遂に主因するものであろう．さらに肘後備急方[41]には李絳兵部手集から引用して，大戟，当帰，橘皮を各1両配伍し，水病の治療を目的とする処方を記している．その他，大戟1味にて皮膚病に用いる神効方という処方もみられる[42]．

大戟を配合した処方は，その後もわずかにみられるが，薬効的にはほとんど変化なく，今日に伝えられている．明代以降，狼毒との間に混同がみられ，今日では，本草文献上から基源と考えられる *Euphorbia sp.* とは全く科属を異にするアカネ科の植物に基づく紅芽大戟が用いられるように，本来の効能や薬効を期待し難いためであったと考えられる．

結　論

以上の如く，中国，日本における大戟の基源植物としては *E. pekinensis* を正品として考定したが，明代に到り，本来狼毒と称すべき *S. chamaejasme* に基づく生薬が大戟の一種とされるに到った．今日なおこの伝統は生きており，*S. chamaejasme* に基づく生薬を綿大戟，または西北狼毒とも称すことから伺える．さらに，今日ではアカネ科の植物を基源とすると考えられる紅芽大戟がある．しかし，アカネ科の植物を思わせる記文は，本草書中に認めることはできない．

日本においては *E. pekinensis* を正品として用い，今日，日本産の大戟として認められるものも *E. pekinensis* に基づくものである．

謝　辞

本研究にあたり，文献の閲覧を許可された京都大学薬学部木島正夫教授，武田薬品工業KK，宮下三郎博士，国立国会図書館の諸氏に深謝する．

40) 張仲景，成無已注“注解傷寒論”人民衛生出版社，北京‘1963
41) 葛洪，“肘後備急方”商務印書館，上海，1955, p. 99
42) 宋王懐隠等編，“太平聖恵方”人民衛生出版社，北京，1959, p. 672

科学史・薬学概論の開講

授業科目開設の意図と学生の対応

川　瀬　　清*

Kiyoshi Kawase: On the experience in teaching "Principle of Life-science" at the Tokyo College of Pharmacy (1973-4)

東京薬科大学では，二十世紀の第四半期が社会の急変と科学・技術の急進による変革の時期であるととらえ，情勢がどのように変ろうとも，それに対応できる素地を作ることが大学の使命であることを確認して，昭和47年度に学則を改訂した，ここでは従来，相加累積的に開講されていた授業科目を整理し，低学年次では基礎的教育の重視を，高学年次では薬学出身者の活動分野に対応する選択コースを用意して多様化を企図した．

この中には幾つかの特徴点を見出し得るが，その一つに，一般教育中，自然・人文・社会の各科学のワクを起えた総合科目を科学概論として開設したことがあげられる．授業科目は科学史および薬学概論それぞそ2単位づつで，前者を一年次前期，後者を三年次後期に配置した．学科目開設以来，筆者が担当して今日に及び若干の経験を持つに至ったので，その実際について報告する．

科学史について

1学年次前期に配置する際，つぎの二項目に教育のねらいをおいた．

(1) 高校時代まで主として知識の暗記に終始する学習にあけくれ，諸現象，諸事実から自分で論理を組み立てる経験に乏しいので，本授業では高校で扱う程度の知識を素材として「何をどう考えるか」という点に主眼をおく．

(2) 今日までわれわれが学習してきた科学・技術は，ヨーロッパ産業革命以来，資本主義の成長とともに育ってきたものである．そして資本の論理が人間存在を否定するまでに逸脱する場合，西欧ではキリスト教的民主主義が，アジア・アフリカなどではそれぞれの伝統文化を背景にした民族主義が歯止めの役割を果してきた．しかし日本では歴史上，外来文化の定着をなりゆきにまかせる傾向があり，西欧科学も明治以来，意図的な選択・再構成をして来なかった．昨今の環境破壊や人間疎外状況の出現も基本的にはこの辺に原因があると思われるので，本授業では「生命科学とは何か」を主題の一つにおくこととした．

教授要目は大略つぎの通りである．

(1) 進化史――宇宙の進化，生命の起源，生物の進化――ここでは，もの・いのち・ひとの存在が階層性をなしていること，生命の物資的基礎と生命現象に内在する歴史性（時間系）の理論に主眼をおいた．

(2) 生活史――自然環境と人間，食生活の展開，生きるための知恵の向上――ここでは進化史をふまえた上で，科学・技術の発展が生活に根ざしたものであり，医薬も「食」から発したことを考察し，これを生命科学の萠芽と位置づけた．

(3) 近代医薬史――近代科学思想，日本における古医学の展開，明治期薬学先覚者，漢薬研究略史――通例の教科では，ギリシヤ科学，ヨーロッパルネッサンス期の科学などが講ぜられるのであるが，筆者は冒頭の立場から，できるだけ日本および東アジアの事情を中心に講義をすすめた．

学生の対応:

学生は最初，高校時代に地学・生物・社会・歴史などの授業で学んだ内容が混然としている様子にとまどう如くであるが，回を重ねるに従い，意図したものを学びとっており，一応満足している．つぎに学生の感想文を一つ要約紹介する；

"私は講義をうける前まで，科学史とはたぶん何年に何が発見され，誰々が何を研究している，というような講義ぐらいに思っていました．そして，宇宙のことや生命の起源，それから植生，食慣行と，正直言ってそれらがどのように関連し，全体として何をねらっているのかよく判りませんでした．でも3カ月近くになって私は，科学史が過去から未来にかけての巾広い学問であり，物と生命と人間の複雑な関係について学ぶものではないかと，意外な方面に広がっていることに気づいてきました．

一番興味をもったのは，生きるための知恵の向上でした，久良々やハシリドコロを食べた人がどんなに苦しみ，二度と口にすまいと考えてつけた名前だと思うと，こんなにも生

* 東京薬科大学

きぬくために戦ってきたのかと，何か植物名の一つ一つに魂がこもっているように見えるのです．昔の人々の努力を無駄にしないためにも私達は今，生命と物質についてもっと深く考えてみなければならない気がします．

この論文を書きながら薬学生であることの意義がはっきりしてきました．作文は苦手ですが，文章にまとめることも大切なことだと思いました．”

薬学概論について

この科目は，一応の基礎的教育を修了し，最終学年次での卒業論文のテーマを決定し，自分の将来についての見通しを立てる時期である3年次後期に配置されている．

当初，この授業科目でのねらいを定めるにあたって，たかだか90分・15回の授業時間で，薬とそれをめぐる科学技術のすべてに触れることなど，到底できぬわざであり，ここはやはり，世の動きを察知し，自分自身を見つめる機会となるような内容のものでなければならぬと考えた．

学生はここでも筆者の考えを了解してくれている．つぎにまた感想文を引用する．これは授業の終りに，次学年次の後輩へ送る言葉として書かれたものである．

“3年で薬学概論の講義があることに対して初めは疑問を感じていた．しかし受講後になってそのねらいというものがわかってきた．基礎的化学を身につけ，これから薬学というものにとり組もうという時期，また将来のことを考え始めねばならないこの時期にこの講義があったことは，やはり大きな意義があったことと思う．ただそのことに気づくのが遅かったことはとても残念である．毎日の忙しさに追われ「薬学とは何か」「我々は薬学を何のために身につけようとしているのか」ということを見失って，ひたすら実習や試験に向っている我々に，時々恐しいものを感じる．入学時，それだけは見失うまいと心に誓っていただけに胸の痛む思いである．薬学概論は単なる単位取得のためのものでないこと，そして常に「自分の学んでいること，行なっていること」をじっくり見つめ，問いかけを忘れてはいけないと言いたい．”

講義内容：

(1) 疾病と治癒，治療における薬の位置づけ，保健と医療，科学と技術

(2) 薬学関係者が負っている現実課題，サリドマイド問題（経過と教訓），キノホルム薬害（経過と問題点），GMP について．

(3) 近代薬物発達史：

(i) 産業革命，基幹化学工業などと薬物の発達．

(ii) 化学療法剤，抗生物質発展小史．

(iii) 明治・大正売薬史．

(iv) 医薬品の使われ方，その特徴と教訓．

(4) 薬物人体試験の課題．

(i) 新薬開発途上における問題．

(ii) ニュールンベルグ憲章，ヘルシンキ宣言，日本学術会議勧告．

(5) 医療の未来予測．

(i) 医療のシステム化，その必然性と問題．

(ii) 医療における薬剤師の課題．

附1 日本医師会長・武見太郎氏の薬剤師への提言（1974. 2. 日本短波放送，薬学の時間）に関すの検討．

附2 薬剤師先輩の授業参加．

附2に示した先輩の授業参加は，できるだけ多くの意欲的に働く薬剤師に現場のなまの声を聞く時間を設けた．キャンパス内での講義と実験の多い学生にとって参考になる所が豊富で好評を得ている．

学生は講義に出て，いろいろな受け取り方をしているが概して言えば，薬学の領域の広いこと，動物実験のデーターから人間の場合を予測することの難しさ，今日の保健・医療のあり方への疑問，多くの薬剤師の社会的責任の果し方への疑問，卒後の学習に対する不安，現行薬学教育の偏向の指摘など，一人一人に何等かの問題提起を成したと考えている．

三たび学生の意見を引用すれば，

“私はここ1年来，ある診療所で調剤のアルバイトをしている．はじめは「なんだ，このくらいのことなら誰でもできるではないか」と薬剤師業務の意義を疑った．しかし薬理学や薬剤学，また薬害の問題を学び，薬についての知識が増えるにつれて調剤が恐しくなってきた．自分の手元が狂えば，ことは自分だけではすまされなくなってくる．薬剤師の社会的責任が実感として判るようになった．”

今後の課題

以上が今日までの状況であるが，今後とも教育内容の精選を繰返せねばならない．もともと実学教育は実社会からの要請を基礎とし，これを未来志向の観点から整理して組立てられるべきものだからである．当面は，薬事関係法規や薬剤供給論など，同時に開講される他学科目と連携しつつ，教育の必要最小量（ミニマム・エッセンシャル）を模索して行くつもりである．

「日本薬園史の研究」の著者・上田三平伝[2*)]

三　浦　三　郎[*)]

Sabro Miura[3*]; A life of Sanpei Ueda as an author of "History of herbal gardens in Japan"

1. 生いたち

日本海に面した若狭の国，この地方の沿岸の自然と聚落の配置はみな型にはまっている．入江の奥には恰好の山がそびえ，そこから源を発する流れは丘陵の裾を洗ってくねり，谷の上に寺があり，そこを降ると決って鎮守の森がある．その繁みの際から田畑が拓かれ，部落の家々が点々とちらばっている．

明治14年3月15日（1881），上田三平が生を享けて幼時を過した福井県遠敷郡国富村，羽賀の聚落もこのような小天地であった．国富村の背景の山は天ケ城山（266 m），富士谷の上手に羽賀寺があり，姫宮の東に蔵王権現の森が繁り，その森の際から羽賀の部落が展ける．森の上手にあった上田三平の生家は大正15年，羽賀の大火にあって焼失した．羽賀と小さな丘を隔て東に奈胡，富士谷の対岸に態野，次吉の二部落があって国富四郷を形成している[1)]．

村一番の貧農に生れた上田三平は少年時代母とともに母の生家，隣りの名胡の部落に過した．

少年の日，泥田の田草をとりながら思いを富士の高嶺にはせ，無性に好きなものは豊大閤の絵姿猿面冠者の顔であったという．多分これは母方の祖父にあたる，京都薩摩屋敷お出入の棟梁が愛読していた講談本の影響であるらしい．

上田氏の先祖に酒井藩主に扈従し，参勤交代の帰り相州小田原あたりで病没した者がいた．上田三平は晩年，同じ相模の戸塚に居を構え，少年の日に思いをはせた富士の英姿を直近かに仰ぎ，静かに余生を過すようになったのも，お先祖さまのおひきまわしであろうと述懐しておられた．

2. 考古学への道

明治40年（1907），福井師範附属小学校の訓導であった上田三平は，この年中等教員地理科の専検に合格した．教諭の資格を得たものの氏の身分は依然として小学校の訓導，富山県の中学校に招かれたがその転出を校長は許してくれなかった．福井師範の教諭を兼任したのはその2年後である．

その以前，福井県教育会から機関誌の編集委員を任命されていた．主幹は東京高師・国漢科出身の手塚岸衛であり，また仲間に俳人

故 上田三平氏肖像

*) 山之内製薬・中央研究所
2*) 日本薬学会 92 年会・薬史部会報告（1972）
3*) Reseach Laboratries, Yamanouchi & Co., Ltd

上田三平氏の生家（昭和 12 年）

の山本武夫もいた．その関係で上田三平もいつの間にか文学青年を気取るようになった．

大正初年，上田氏の住んでいた芦田屋敷の近くに，福井県内務部長・松村才知の官舎があった．部長夫人は法政大学出身の新潟県知事，民政党幹事長を歴任した太田政弘の長女である．ある日，松村氏宅に招かれ令嬢の家庭教師を懇望された．夫人と対談中，松村氏も雑談に加わり，たまたま話が上田氏の身上に及んだとき，「地理科の免許状をとって，それを学問として専攻しようとする考えも結構であるが，何れ君も中学校の校長にくらいなるであろう．そのとき君の部下に多くの科目の免許状を持ったものが居ると君も淋しかろうから，今の中に奮発して歴史の免許状もとっておいては何うか？　地理科の時のように元気にやったらで何もなかろうに」とさとされた．

人間の値打ちを免許状の数で判断するなんて官僚の浅ましい根性だと反発を感じながら，それならすぐにも合格してみせると，気負いこんで受けた西洋史の専検に見事に失敗した．一年おいて日本史と東洋史を受けてみたが，予備試験に合格したものの矢張り本試験の壁は厚かった．その翌年，再び日本史と東洋史を試みて，漸く二科目に合格することが出来た．

その当時，上田三平は母校の福井師範で副教務として教頭を援け，また同窓会に顔のきく立場であったから，その境遇に甘んじ．訓導時代に地理科の専検を狙った当時の真面目さを失っていたのである．

「いろいろなことに興味をもつのも悪いことでないが，矢張り一つの本領を崩さぬ程度に精進しない限り，独立した一個の存在になり得ない」と，その後の上田三平は文学にかぶれていた当時を思いおこして自戒している．もし，松村才知の忠告を諾(き)かなかったら，上田氏は歴史（日本史・東史洋）の専検をとらなかったであろうし，従って考古学者として史蹟調査の仕事に携わることもなく，一介の田舎教師として終る破目になっていたであろう．

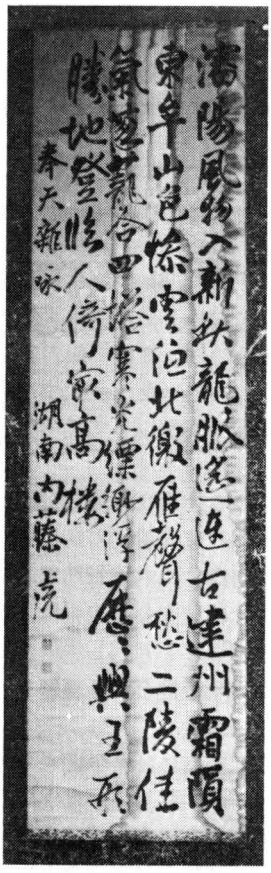
しかも時代は国の教員養成施設は漸く整備され，専検出の教諭を必要としない転換期を迎えていた．大正 4 年（1915），この年上田氏とともに歴史科の専検を通った者は僅か 5 名，思えば上田三平の人生にとっても危い転換期であった．

3.　湖南・内藤虎次郎博士との出合

大正 3 年，福井師範の校長・本多忠綱に対し，京都大学教授，内藤虎次郎博士から，若狭の史蹟調査に適当な案内人を斡旋して欲しいという依頼があった．師範で地理と歴史を担当していた上田氏にこの役が回ってきた．上田氏は当時，支那学の発展に貢献した東洋史の権威，湖南・内藤博士に面識はなかった．しかし，その少し前比叡山で催された講演会の新聞記事と写真によって博士に多少の知見をもっていた．講演は満州の沿革を中心にしたものであった．その中に沿海州に漂流した若狭三国港の船頭，竹内藤右衛門のことにも触れているから，博士の調査目的はその資料の採集にあると丸そ推測した．幸い藤右衛門の子孫は福井駅前に三国旅館を営み，しかも子息 2 人とも上田氏の教え子であった．

正保元年（1644），満州に漂流した難破船の乗組員たちは，朝鮮人参を囮りに山中におびき出され，土匪に惨殺された人参残酷物語を，藤右衛門の子孫たちが「異国物語」と題し，お家流にまとめておいた資料も見付かった．上田氏は内藤博士の若狭来遊を心待ちにしていた．

博士を福井駅頭に迎えて宿舎に案内し，調査の予定を打合せてから清国の「順治宝録」



湖南・内藤虎次郎博士が上田氏へ与えた書
奉天雑詠

をはじめ，藤右衛門たちの韃靼漂流に関する，支那朝鮮の異本や満州資料のあらましを承った．

その翌日，三国町の真言宗性海寺に未整理のままであった竹内家の墓所を尋ね，遺蹟の撮影や拓本どり，また実測法など湖南博士の調査手法をつぶさに学んでいる．

このとき湖南博士に揮毫してもらった「奉天雑詠」と題する律詩と，博士の礼状は表装され，晩年の上田氏はこれを床の間に掛けて碩学の遺徳と故郷の事蹟を偲んで心を和ませていた．

4. 三浦周行博士と史家の心得

大正のはじめ，福井県庁には後世に大成した小壮有為の人材がそろっていた．知事は早稲田大学出身の佐藤孝三郎（前人事院総裁の父君）であった．文化事業の好きな知事は大正4年 10 月，県史編纂の予算を県議会に提出しその承認を求めた．多分，前年に来遊した湖南・内藤博士の示唆に基いたものらしく，その編纂主任に上田三平を擬していた．しかし，知事直々の交渉談判にも拘ず，上田三平はその就任を頑として固辞している．それから地方課長湯沢三千男の官舎に招かれ，深夜の火鉢を囲みながら県史編纂主任について人選の相談を受けている．上田氏は未知の人であるが若狭の出身であり，石川県師範の教諭，新進気鋭の経済史学者，牧野信之助の名をあげた．この提言に基いて牧野氏は福井県史編纂主任に迎えられ，また氏の恩師筋にあたる法制史の権威，京大教授三浦周行博士を顧問に迎えてこの事業は発足している．

しかし，三浦博士の調査に同行することがあっても，古文書や古記録の解読に素養を欠いている上田三平は，博士に叱られ通しであった．一たび資料に向えば羽織をかなぐり捨て，小柄な痩軀を阿修羅に変じて古文書の筆写に打込む，学者の真摯な研究態度に上田氏は深い感銘をうけている．

上田家には三浦周行の草した，史家の心得という一軸がある．

「史家は常にその身を研究の対象である人物事業と同年代同一環境におき，一段と高き高処より冷静にしかも同情のある観察をして批判することを要す．これ嵩山樵の常識」とある．

後年，上田三平は朝鮮総督府の古蹟調査委員に推薦されているが，これは三浦周行博士に叱られ通したときの賜ものだという．

大正5年，福井県民念願の国鉄小浜線の工事が始まった．そのとき土砂の採掘現場，西塚から古墳が現われた．宮内省から増田平信が実地踏査のため現地に派遣され，その結果，発掘調査は福井県で当たることなった．上田三平はその事業にかり出された．この西塚古墳の発掘調査は考古学者上田三平の手がけた最初の仕事である[2]．

同じ大正5年，福井県では県史編纂の事業

上田三平氏の顕彰碑（小浜市公園）

に平行して，史蹟勝地調査会が設けられ，上田三平は師範教諭のまま県庁に入ることになった．この調査会はわが国考古学に初めて科学的調査法を導入した，京都大学教授浜田耕作博士（後の総長）と，東京大学講師大類伸氏を顧問に迎えている．満4年にして福井県史蹟勝地調査報告書二冊をまとめ，その事業は一応終っている[3]．

5.　論敵を愛した本山彦一翁

大正 10 年，上田三平は国史大系の編者，東京大学教授黒板勝美博士から，福井県の仕事が済み次第，内務省にくるようにと要請されていた．しかし，隣県の郷土史研究会・加越能史談会から福井県の知事を通じて，石川県の史蹟勝地天然記念物の調査をやって欲しいという交渉も受けていた．そで湯地石川県知事を通じて黒板博士の諒承をとり，一先ず向う3年の間，石川県の調査に当ることになった．

石川県時代，新聞紙上を賑わしたものに加賀法皇山の横穴調査がある．上田氏の古墳説に対し，毎日新聞江沼支局の中谷記者と，小松中学校の歴史の教諭が穴居説を主張したため地方紙の紙面は沸騰した．そのとき新愛知新聞の有能な記者が上田説を詳報してこの論争が終っている．

しかし，この話は毎日新聞社主・本山彦一翁の聞くところとなり，サンデー毎日誌上に加賀法王山横穴古墳に関する寄稿を求められた．何れにせよ，この論争が端緒になり，上田三平は本山彦一翁から終生かわらぬ知遇をうけるようになった．日本薬園史の研究に際しても，翁個人と毎日新聞社から助成金を贈られている．

6.　派閥抗争の渦巻く奈良の都にて

大正 13 年3月 31 日，上田三平は北越の地，石川県における史蹟勝地天然物の調査に一応の結末をつけ，2冊の報告書を刊行し[4]，新任地の奈良へ赴いた．金沢では官民合同の盛大なる送別の宴を以って氏の労に報いている．

奈良における仕事は平城宮趾の保存工事に伴って出土する遺構遺物の調査であった．史蹟の豊庫，奈良には内務省地理課に属す史蹟勝地天然記念物調査会の出先機関がおかれ，奈良県知事がこれを管轄していた．奈良の人びとはこの行政機構をよく理解してなかったものらしい．

当時，古都奈良には各学閥を背景に老獪な学者グループが蟠踞していたという．地元の国立奈良博物館も一方の雄である．この連中にとって平城宮趾の発掘調査という大事業は垂涎の的である．そこへ無名の上田三平がこの役に赴任してきたことから，奈良県内務部長・斉藤直橘が氏の乾分を連れてきたものと攻撃の矢が放なたれた．不平の輩は県会議員の竹田仁蔵に働きかけ，予算審議の経費削減に名をかり，上田三平を県議会において弾劾演説を以って歓迎することにした．予算審議の日，竹田議員はやおら立ち「上田三平は内務部長の寵児にして頑迷固陋，何んらの学識もなく……」とやり初めたとき，「おうい．竹田君．貴下が削減せんとしている予算は国庫交附金じゃないかね．国がくれる金なら貰っておけよ……」と，与党席から面白半分なヤジが飛び交い，切角の弾劾演説も壇上で立往生とげている．

しかし，事件はそれで済まなかった．県議会閉会後，奈良新聞の主筆赤堀氏が竹田議員の席から，演説草稿を鷲づかみに持出し，その全文を翌朝の紙面に飾ったことから，斉藤

内務部長と竹田議員の反目が始った．暫くして上田氏は教育課長から反駁文を書くようにそそのかされ，これが2日間に渉って大和新聞に掲載されたことから騒ぎはますます沸騰した．上田三平は竹田議員に叱られ，また斉藤内部長にも叱られ散々の目に遇っている．

しかし，この事件によって上田三平の名は古都に知り渉り，交際の相手も増え，その後の史蹟調査に何彼と便宜を得ている．

上田三平には法隆寺の建立年代の測定を目的にした，出土古瓦の研究がある．この研究中，五重塔の側柱礎の様式から，心柱の礎石も確める必要のあることを，係の岸熊吉に進言している，この提言が五重塔心柱下の空洞発見の素地になっているという．

平城宮趾の広さは4万坪，発掘調査の広さも組織も空前のものであった[5]．上田氏は3年にして奈良での任務を了え，昭和4年4月3日，斉藤内務部長や毎日新聞社主・本山彦一翁の見送りをうけ，単身百花繚乱の奈良を発って内務省に入っている．

世間的因果の派閥抗争が渦巻く古都奈良において，孤独無援の上田三平の身辺を気遣っていた者は，教育課長土居章平であった．後年，土居氏が初めて知事として就任した山梨県では，相模川ダム建設により明治天皇の奉迎所趾が水没するという，前任者から未解決の境川事件が待っていた．聖蹟の水没予定が政争的トラブル・メーカーと，ダム建設反対の住民に利用されていた．山梨県の聖蹟指定の担当者は，幸いにも当時文部省にいた上田氏であった．上田氏は措置を一先ず棚上げにして知事の立場を擁護し，奈良での好意に謝している．

昭和18年，土居氏が石川県知事に転任してから，かねて山梨県民の主張通り，境川奉迎趾に標識を建て，19年5月これを水没の場所から上野原行在所構内に移し，傍にその理由を刻んだ副碑を建て，この事件に一応の恰好をつけてある．

7. 薬園史研究の動機

奈良県松山町に吉野葛を生産していた森野薬園がある．上田三平の奈良在任中，徳川頼倫侯をはじめ，三好学，白井光太郎，国府氏らが同薬園の観察に現われ，教育課長の土居章平も案内に同行した．

三好学はわが国において植物生態学を生理学から独立させた植物学者であり，後年，上田氏と同じ内務省の地理課に籍をおき，天然記念物の保存に力を尽している．また氏は福井中学時代，上田氏の叔父宅に下宿していた関係で上田氏と旧知の間柄であった．

白井光太郎は上田氏の郷土の先輩ともいうべき，福井藩江戸詰藩士である．藩主・松平春嶽に学んだ英語のテキストを自慢げに持っていたという．飯沼慾斎を継ぐ本草学者であり，植物病理学の開拓者である．

その後，土居氏は森野薬園の歴史的価値を上田氏へ大いに吹聴した．一方，奈良女高師の植物学講師，岡本勇治は宇田生薬会社の顧問として生薬の研究に従事し，当時会社々長と郵便局長を兼ねていた松尾七郎とともに，製薬の実際に携わり，そのカタログなど見る機会も多かった．その関係もあって森野薬園には一方ならぬ関心を払っていた．

一方，明治38年，上田三平が小学校訓導に就任して初めての夏休，神田の開成中学校で開かれた第1回理科講習会に出席し，柴田桂太の植物生態学や服部広太郎の植物解剖学を聴講して深い感銘を受けている．こんなことも薬園史研究の動機になっていることも否めない．

昭和2年（1927），内務省大臣官房地理課に移った上田三平は，唐沢課長や児玉事務官の諒解の下に本格的に薬園史の研究に取組んだ．森野薬園の実測は奈良の在任中にすでに了っていた．三好学の関係方面えの推挙と，白井光太郎の惜しまざる資料の閲覧と筆写の便を得たため研究は漸次進展した．

とくに小石川薬園の累代管理の家柄であった芥川辰十郎の先代が，幕府の崩壊とともに静岡に退去したが，上京の折に持帰った門外不出の多数の記録と遺物を，親族会議を開いて令息の寿君が公開してくれた．この未公開資料の調査によって，従来伝わっていた小

石川薬園の沿革も一変し，従って東京市史稿などこの項は改訂の必要にせまられた．

8. 学士院における講演

昭和3年，上田三平の「日本薬園史の研究」は，帝国学士院から推薦され，有栖川宮奨学金 1,500 円を受領している．当時，学士院から研究助成金の推薦を得る前提として，研究内容は学位を有する者の指導に基くものとの風聞が流れていたというから，第一部から推薦された辻善之助博士の，皇室に関する文献調査の研究はうなずけるとしても，第2部から推薦された上田三平の研究は例外に属すものかも知れない．上田氏の研究は理・工・医・農学の分野から推され，選考委員は三好学，伊東忠太，吉川祐輝他2名であった．就中，農学の吉川博士は強く推したといわれる．

昭和4年 11 月 13 日午後4時，上野公園の帝国学士院講堂において，上田三平は学士院会員約 70 名を前にし，「日本薬園史の研成」の究果を講演した．隣室には薬園に関する遺物や古記録，絵図面などを展示しておいた．その中には尾張藩深井御薬園の模写があり，これに侍医の三浦謹之助博士や漢方医家出身の京都大学総長・荒木寅三郎博士らの目が惹きつけられた．

講演後に行う恒例の晩餐会の席上，独学の研究者・上田三平を掘り当てた三好学に賞讃の声が集った．そして三浦謹之助博士からこの研究成果を刊行するために，さらに助成金の交付を推薦すべきことが提案された．その結果，「日本薬園史の研究」はその翌年，再び有栖川宮奨学金から破格の 2,500 円を拝領している．

上田三平の名著「日本薬園史の研究」[6] は有栖川宮奨学金の管理者，高松宮殿下が渡英に際し，50 部彼の地に持参され，またこの研究の抄録を載せた帝国学士院欧文紀要 (Vol. 5, No. 10 (1929)) 約 1,000 部は広く海外へ配布されている．

9. 払田柵阯

昭和3年，内務省の大臣官房地理課におかれていた，史蹟勝地天然記念物の調査と保存の業務はその一部，文部省に移管された．行政機構の変革に伴って上田三平は文部省に転勤している．そこで手掛けた最初の主な仕事は払田柵阯の発掘調査である．

わが国平安期における北国経営の出先機関であり，兵站基地でもあった柵阯発見のきつかけは，秋田県六郷町出身の農民作家・後藤寅之助によって作られた．岩手県史蹟調査員・菅野義之助らは，そこは人為工作の施された跡であることを確めた．

昭和5年 10 月，この柵阯の発掘調査は政府の手で行うことになり，上田三平がこの調査を担当している．その結果，予想もしてなかった処から，平安期に設けられた広範な柵阯が確認され，初めてその全貌を明かにすることが出来た．

昭和 14 年，上田三平は近江の大津宮阯の実測に当っている．そのとき崇福寺塔阯から心柱の礎石が発見された．以前，法隆寺五重塔の心礎の底から空洞発見の因をなしたときの経験を想起し，精査して側腔の存在を知り，そこから金銀銅三重の容器に納められていた青瑠璃の壺を発見した．

元来，このような出土品は国立博物館の保存に帰すべきものである．当時，滋賀県知事は上田三平がかって奈良県在任中，保安課長をしていた近藤攘太郎氏であった．知事は近江神宮々司の身分を語り，地元民の意向を訴えて，出土品の帰属について上田氏の尽力を懇望した．今日，国宝・青瑠璃の壺は近江神宮の神宝として，同社の宝物庫に奉安されていることになっている．

10. 弘生式稲作文化解明の恩人

昭和 18 年8月6日，静岡市の東南部，水田の中から丸木舟をはじめその他先住民の生活用具らしい遺物が現われ，それらの調査に関する申請が静岡県から文部省に提出された．

第2次世界大戦の最中であり，場所は軍用地ともいうべき住友金属工業の敷地内の出来事であることから，県では初め傍観の体を装っていた．しかし，好事家は県当局の意向を忖度することなく，勝手に採掘を始め，中でもアマチュア考古家の安本氏らが現れて中央の学者に連絡したため，毎日新聞がこれを記事にとあげ騒ぎが一そう大きくなった．その騒ぎに刺戟され，大場磐雄をはじめ調査を希望する者は続々と現われ，一方，その調査費用を浅間神社で分担するという噂さも流れ出した．

しかし，静岡県の内政部長，西井一孝はこれらの浮説に頑として動かなかった．氏の脳裡には，前任地山形県において城輪柵阯[9)10)]の発掘調査に当っていた上田三平の姿が去来していたからである．

結局，登呂遺蹟の調査は静岡県の要望通り，政府の手で発掘調査が進められ，上田三平がこの作業を担当している[10)]．

もともと，上田三平には地理学的な素養があり，考古学上の発掘調査においても実測法や地磁気偏差の利用など，余人の追随許さぬ特技をもっている．加えてわが国考古学の研究に初めて科学的調査法を導入した，浜田耕作に親しく薫陶を受けている．

日本民族の文化的源流に位置する弥生式稲作文化の解明に，登呂遺蹟の果した役割は大きい．この遺蹟の初期発掘調査が上田三平の手に委ねられたことは，日本民族にとり僥倖であった．

今日，観光資源の一翼を担っている登呂遺蹟の傍らに佇つとき，もしこの遺蹟が好奇心だけが旺盛な，組織的訓練を経ないアマチュア学徒に委ねられ，破壊でもされていたならば思うと慄然と肌に粟するを覚える．当時の静岡県内政部長・西井一孝の先見の明と，考古学者・上田三平の業績に改めて感謝せずにはおられない．

11. おわりに

上田三平（1881～1950）は小学校准教員を経て福井師範に学び，同校附属小学校訓導在職中，地理，日本史，東洋史の専検に合格した苦学力行の人であった．同師範に教鞭をとる傍ら，福井県史蹟勝地調査委員を兼任し，次で石川県史蹟勝地調査委員を歴任した．さらに内務省大臣官房地理課に籍をおき，史蹟勝地調査委員として奈良県に出向し，平城宮阯の発掘調査に当っている．その間，同県学務課長土居章平の奨めによって森野薬園の調査を行っている．

1927年，文部省に転じ三好学の意向と指導の下に，日本薬園史の研究に着手，資料の大半は白井光太郎に仰いでいる．研究費として有栖川宮奨学金を拝受し，1929年，同研究成果刊行費として再度助成金を拝領して「日本薬園史の研究」を出版している．本著の内容は帝国学士院欧文紀要にも抄録され，広く海外に紹介された．

元来は考古学者，上田三平の業績からみれば，両三年にして終っている「日本薬園史の研究」は余技にしか映らない．

しかし，わが国文化史上，特異の存在である薬園史の研究を体系づけた功績は大きい．

また上田三平の研究によって，わが国封建期の上部層が，国民生活にいだいている文化的志向性の現われともいうべき，薬園の性格をして文化史上に位置づけることも可能にした．

一方，西洋生薬の原植物をも多く植溜していた薬園の経営を，内面的に支うべき当時の医学は無力であった事実，さらにこれら先人の秀れた業績を基盤にすることなしに発足している，明治期の医・薬学の性格など，上田三平の「日本薬園史の研究」によって教えられることが多い．

上田三平にはその晩年，病床で認めた「史蹟を訪ねて三十年」と題したメモがある．本報の内容はその自筆メモに基いている．なお資料を提供して頂いたお遺族，ならびに福井師範で上田三平に学んだ教え子，二松学舎教授橋川時雄先生，および窪田太逸氏のお尽力に対し厚く謝意を表します．

参 考 文 献

1) かが家と郷土; 郷土, 2 (1940) (刀江書店)
2) 若狭国遠敷郡瓜生村西塚古墳; 考古学. **7**, 8 (1918)
3) 福井県史蹟勝地調査報告 (1920) (福井県内務部)
4) 石川県史蹟勝地調査報告 (1923) (石川県内務部)
5) 平城宮趾調査報告書 (史蹟精査報告第 2) (1926)
6) 日本率国吏の研究 (1930) (丸善)
7) 払田柵跡 (1931) (秋田県高梨村保存会)
8) 城輪柵跡 (1932) (山形県本楯村保存会)
9) 払田柵趾・城輪柵趾 (1938) (吏蹟精査報告第 3)
10) 駿河富士原における原始農耕—聚落遺蹟の研究 1 ～ 2 報; 科学 **16**, 3, 4 (1946)

昭 和 48 年 度 決 算

(収 入)	312,712(円)	(支 出)	134,158(円)
繰 越 金	58,878	郵 送 料	9,870
会 費 (賛助会員)	45,000	事 務 費	2,160
(一般会員)	159,000	印 刷 費	122,128
(学生会員)	1,500	(残 金)	178,554
広 告 料	30,000		
雑誌売上代	14,400		
寄 附	3,500		
雑 収 入	200		
利 子	234		

徐福不老不死の薬を求めて渡来

宮　道　悦　男

我々日本人の平均寿命は戦前は人生僅か50年といわれていた，このように大体男女平均年齢は50年にみたなかった．即ち戦前の昭和10年頃は男46.92才，女49.63才に過ぎなかったのである．それがその後次第に延びて行って，昭和46年になると男は70.17才，女は75.40才となり，茲に初めて我国は世界の長寿国の仲間の一つに入ることができた，世界の長寿国スウェーデンは男71.85才，女76.54才，オランダは男71.00才，女76.40才，ノールウェーは男71.03才，女75.97才，ついでデンマークは男70.60才，女75.40才，又アイスランドはほぼデンマークのそれに近いといわれるから我が日本国は今や世界第6位の長寿国の栄位を獲得するに至ったといえる．

長寿或は不老不死の人類希いは古今東西を問わず全く同一である．従って人類の切なるこの希いを達成するため西欧に於ても東洋に於ても随分古い時代から長寿薬の探索に努力が重ねられて来た，殊に中国に於けるこの研究には特に優れたものがあった．かの大きな権勢をふるい，栄耀栄華を極めた秦の始皇帝も長寿薬の入手には強烈な意欲を焔やしたものである．

この皇帝腎虚を病んだ時に不老不死の薬或は回春の薬を求めて遠く我国に家臣を派遣するに至った，これが歴史的に有名な徐福の探薬である，その頃中国に，こんな伝説があった，即ち渤海の中に蓬萊，方丈，瀛州（エイ）という三島があって，そこには仙人が棲んでいて，不老不死の薬草が生えている．

1. 秦の始皇帝

往時のことである，中国に韓，魏，楚，燕，趙，斉，秦の七つの国があって互に覇を競い，所謂春秋戦国時代を現出していた，秦国の首領となった始皇帝は前246年に13才で王位に即き，成人するや次第に各国を巧みな外交工作や陰謀を用いて征服し，遂に巨大な現在の中国の領土に近い統一国家を創設することに成功し，自ら始皇帝と称し権勢を恣いままにした．

始皇帝は又北方匈奴の攻撃を進めると共に，その反撃に備えて長さ五千里に及ぶといわれる，かの有名な万里の長城を築き上げ，更に三十六の宮殿よりなる阿房宮を造営し，ここに三千名の所謂，翠眉紅粧の美女を配し，折りあればこの美女達と戯れていた，又各所に遊楽のための運河を開鑿するなど，一面から見れば確かに史上まれなる偉大な君主であったといえる．彼れの築いた万里の長城は今日でも残っていて，中国の人々の自慢のタネの一つになっている．併しながらこれ等の大土木工事に人民を牛馬の如く使役し，重税を取り立てたので人民の中に怨嗟の声が高まり，学者達も亦帝の施政を強く批判するに至った．処が帝は茲に於て思想弾圧政策を採り，批判する学者，多数の儒者を坑殺し，諸子百家の経典を取上げて焼き棄てる等の暴政を行った，この点では帝は極端な暴君であったといえる．

2. 始皇帝の夢

漠楚軍談，巻三によれば昔秦の始皇帝が顕慶殿で午睡をしていた時，あの世に行った不吉な夢を見た，帝は心安からず急いで都城に還幸して群臣を集め不老不死の薬は得られないか，これを手に入れて万世まで天下の君主でありたいものだ，なんとかよい方策を考えてほしいと協議した，この時臣下の宋無忌はこう進言した．東海の内には三つの仙山がある，即ち蓬萊，方丈，瀛州の三島は八節春の

---

*

如く，四時清朗で寒暑も覚えない．そしてこの中には長生不死の薬草があって，これを服すなれば寿命は極まりないそうである．これを獲得する手段をお考えになっては，これを聞いた皇帝はそれではお前はその仙山を見たことがあるのかと問われた，この時宋無忌は答えて申すのには，方士（学者）徐福というものが曾って東海に至って蓬萊，方丈等の島の中には多くの仙人が鶴に乗って逍遙しているのを見たと言っている．この徐福は目下私の家に居りますから召し寄せられお問い下さい．

そこで皇帝は徐福を招いて不老不死の薬を求めるにはどうすればよいかと尋ねられた．徐福の申すには不老不死の薬を求めることは非常に困難である．併しながら帝が大船十雙，童男童女各五百人，金銀珠玉，飲食物，用器を臣に授けて下されば東海に行って不老不死の薬を求めて参りましようと述べた．この時皇帝は非常に喜ばれて詔を下して大船を造らしめ積荷その他の用意万端を備えさせた，かくて徐福は遂に東海を指して出発したのであるが，その後杳として消息は絶えてしまったということである．

3. 徐福の陰謀

金立山の金立神社御縁記には徐福一族の渡来の事情について次の如く述べている．秦の始皇帝は万里の長城を築いたことで有名であるが，皇帝はこの工事や遊楽のため作った運河工事に人民を牛馬の如く使役し，更に人民に重税を課してこれを厳しく取立て，これ等の行為を非難した学者を穴に埋めて殺すなどの暴政を行ったので怨嗟の声は地に満ちた，このような情勢であったので徐福一族の如く学才に長じたものは何時皇帝の魔手によって生命を奪われるか計り知れなかった．徐福一族はかねてから東海に国をなす蓬萊なる国が平和の楽土であることを承知していたので，折りを見て一族郎党大挙してこの国に移住したいものと志していた．処がたまたま始皇帝が悪夢から不老不死の薬を求めると聞き好機到れりとなし，うまうまと皇帝を動かし国費で郎党の移動に成功したのである．徐福一族は最初から再び秦の土を踏むなどは夢にも思っていなかったので，始皇帝が徐福の帰国を幾年待てども遂に帰らなかった事実より見て明白である．

又故大野泰司氏も徐福の渡来について次の如き考察を下している．

徐福の一族はかねて始皇帝の暴政に苦しむ民を見て，機会あれば大挙して東海の蓬萊の楽土に移り住みたいものと思っていた．天祐か始皇帝の夢がこの野望を達する絶好のチャンスとなって現われたのである．

併しながら徐福は，この野望を胸に秘めて只管始皇帝の望みを叶えるために渡海するかの如く装い，見事にその思いを達し，東海の日本に渡ったのである．愈々目的の（蓬萊）渡航した一族は大いに勇気をふるい，又周到な配慮と幾多の探検調査を重ね，一族安住の適地（一族全員の安住地，又は一族を幾つかの土地に分住せしめる適地）を見出すことに多大の苦難と年月を費したようである．

4. 徐福の渡来

徐福は蓬萊の島即ち我国に渡来した際．その着陸地点がどこであったかは明かでない．この点については諸説があるので，一応これを次に述べておく．

牛窪記によれば

徐氏一族並に蘭姿玲節の童男童女五百人は金銀珠玉を積んだ二十雙の船に分乗して，勅によって海を渡り我が日本に来た，徐市は不尽山（富士山）に出て，駿州に至り，徐明は金峰山（熊本）に入り，徐林は肥前（佐賀）金立山に住し，徐福は箸津紀州古座に留まり，後熊野に入った．

上記によると渡来した一行の首脳部は徐市，徐明，徐林，徐福と見られるが，この他の種々の記録によって徐氏一族のリーダーは徐福であったことは間違いない．この徐福は斉の人で始皇帝に方士として仕えていた．又一説によれば始皇帝の第三王子とも伝えられるが，この王子説は真実性が薄い，いづれにしても徐福は秦の国でかなり身分の高い人物

であったと思われる.

又北島磯舟著によれば,

徐福一行は船団を組んで東海に舟出し,堂々と有明海に入り,沖の島を通り竜王岬を目指して船を進め一度ここで疲れを休め,更に前途を定めて浮盃津(フハイヅ)の搦(カラミ)(新北村)に上陸した.搦は今の福岡県大野島と相対峙する土手の少し窪んだ地点にあたる.

徐福一行は搦から寺井津に進み,このあたりで分宿して,しばらく滞在した模様である.此所に一行が到着した時徐福が疲れを休めたという腰かけの石というのが残存している,又飲料水を得るため井戸を堀り,この井戸水で徐福が手を洗ったという地点を人々は手洗井と呼んだが,後に寺井と称するようになったといわれる.徐福一行は更に陸行して川原に向い,茲でも暫く滞在した.

なお太宰管内誌によれば徐福の一行は搦に上陸する前に一旦竜王埼(杵島郡)に上陸し,再び船に乗って搦に向い,この地点に上陸したと述べられてある.

又海道諸国記に曰く,

孝霊天皇の七十二年(前290〜240年の間)に秦の徐福は不老不死の薬を駿州の不尽山や紀州の熊野等に求めたが,遂に目的を達することができず,本国金立山(九州)は霊地であると聞き,この山に登ることに決意し,船を仕立てて南海より有明の海を経て浮盃という港に着し陸行して川原という所に休憩し,ついに此所に止まった,川原は今の大門部落の南から金立部落に至る間の地点である.

更に熊野地方の古記録によれば,

その昔秦の始皇帝は徐福に命じて不老不死の霊薬を求めるため童男童女を引き連れ,多くの金銀財宝を携えて,東の方蓬萊の島に向って舟出させた.徐福一行が熊野地方(今の三重県南牟婁郡新鹿村)に到着したのは人皇七代孝元天皇の時代で紀元442年(前214〜157年の間の頃)といわれる.

又竜道寺党戦記は次の如く述べている.

孝霊天皇の七十二年に秦の始皇帝の王子徐福という者が帝の命を受けて不老不死の霊薬を求めて日本に渡来した,金銀珠玉で飾り立てた大船二十隻に分乗して美しい音楽を奏しながら佐賀の東南,川副郷の東端にあたる浮盃の沖合に入港した.茲で一行は四組に分かれ徐市は富士山へ,徐明は熊本の金峰山へ,徐林は紀州の熊野山へ,又徐福は佐賀の金立山へと向った.

以上の諸記録より徐福の我国の最初の上陸地点が佐賀地方であったか,或は熊野地方であったかを判断することは甚だ六ケ敷い,併しながら,

イ) 孝霊天皇は孝元天皇より一代前である.

支那大陸より我国に渡来するには有明海の方が近い.

ロ) 新宮市の蓬萊山の麓にある速玉神社に徐福の墓があり,又この墓の側に徐福の重臣七人の塚がある.

ハ) 金立山附近,その他九州いづれの地にも徐福の墓或はこれに類するものを見付つからない.

ニ) 徐福は熊野地方に住みついて人々に耕作の技術や漁法等を伝授した,熊野地方は捕鯨の盛んな所であるが,これは徐福の教示による.

以上より推察すれば恐らく徐福は最初浮盃に上陸し,後金立山に入って居を構え,意図する植民政策をねったが,大陸生活に慣れた彼れにとっては規模の点からこの地では満足出来ず,更に適地を求める必要にせまられ,この地の開発は自分の股肱と頼む徐林とその一族に托し,徐福は適地の探検調査のため,再び船に乗じ紀州熊野地方に出掛けたものと推定される,而して金立地方に於ても,亦熊野地方に於ても人々に大陸文化を注入して,その地の文化の向上に努め日支両民族の同和を計り平和境の実現に成功したものと見られる.

5. 徐福一行の北上

徐一族は数百人の青年男女で組織された開拓団を二十隻の大船に分乗させ,各船を美しく飾り立て,且つ美しい音楽を奏しながら有明海に突入して来た,これは現地日本の人々

から異国の侵略船又は海賊船と見あやまれるのを避けるための配慮であったかと思う．又積み込まれた多くの金銀財宝は現地人の宜布工作用であったのではないかと思う．

さて徐福一行は搦に上陸後，寺井を経て川原に至り，茲で暫く滞留し，北上の計画を樹てた，このあたりは蘆原や，カヤの原や，或は泻，湖が多く北上の道は歩行困難であった，そこで手持ちの布を敷いて行進した，今の千布まで来た時恰度千反の布を使ったので，この地を，その後，千布と称するようになった，この時使用の布は山へは運ばず，この里に塚を作って埋めた，これを千布塚と名づけている．

徐福一行の本隊は千布から白金土井を通り，水路を通って今の石土井に上陸し，又支隊は川の東側を上って来たので，これと合流した，この際河を渡るため本隊は川の深さを投石によって計ったといわれ，今も投石の伝説が残っている（今の徳永川は昔はこのあたりを流れていたようである）．

6.　玄蔵松並に玄蔵屋敷

大字千布字東千布にある金立社（金立支所）の北方三百米位の県道の西側に玄蔵松と呼ぶ所がある，此所は往時徐福一行が金立山に登る目的で千布にやって来て，登山の道案内役を探し求め，幸い百姓玄蔵を発見した場所である，玄蔵はこの地方の豪族であって，当日は丁度此処で野良仕事をしていた．

彼れは徐福の願いを入れて案内役をつとめることになった，それを記念して，このところに松の苗を植えた，この松が玄蔵松といわれるようになった，但しこの最初の松は枯れて，この松の替り，今は小さい松が植えられてある．

又前の金立支所の直ぐ近くに当時玄蔵一家が使用していた井戸が残っている．

玄蔵が案内役を引き受けた際，一応我家にと，一行を自分の屋敷に案内し，お茶等の接待をした，特に徐福に対しては酒肴を進めて歓待し，我家の秘蔵の娘お辰を陪席させて酌をさせた，これが縁となって，娘は徐福の心を動かし，互に恋を語るようになった．

北島磯舟の手記によれば，徐福は山上に居を構えてから山の尾根をつたい，更に谷を下ってお辰と逢瀬を楽しんだという．

宇東千布観音周地に建てられてある小さな観音堂にはお辰が祭られてある，お辰は近郷近在きっての評判の美女であったので，徐福もお辰に，つよく恋をしたものと思われる，併しながら徐福は異国人であるので，当時の土地の人々は異国人との結婚は認めなかった，又徐福の方も徐福は一族の長として責任ある身分であったので晴れて結婚という訳には行かなかった，そこで二人は只だ時々機会を造って恋を語り，思いをとげるより他に道はなかった．

さてその後徐福は，なさねばならぬ仕事が出来て次第に多忙となり，二人の逢瀬はままならぬ状態になってしまった，それでお辰は遂に，はげしい恋わずらいに落ち入り，果ては明日とも知れぬ重病人になってしまった，お辰の母は娘の心情を聞きただした処，お辰は苦しい心境を打ち明けた，そこで急ぎ使を金立山に走らせて，事の次第を徐福に知らせた，この時徐福の心はお辰に飛び，早速にもお辰の枕辺に行きたかったのであるが，一族の者達に遠慮して思うにまかせず，秦の国から大切に持参して来た二本の宝剣の中一本を使に托して，これを自分と思って，やがて逢う日の機会が来るのを待って欲しいと伝えさせた，お辰はこの宝剣をひっしと抱きしめ，あわれにも日ならずして息を引きとったという．

7.　徐福金立山に登る

徐福一行は前項の如く百姓玄蔵の案内で愈々目的の金立山探険のために出発することになり，石土井に於て本隊支隊は勢揃をなし，金銀財宝を駄馬に積んで東方に向って前進を開始し，上古賀部落金立の森で一泊した．

このあたりの地帯は森林地帯である，この金立の森を出発した一行は久保泉町川久保宿の北方迄来て一休みをなし，前面の谷や川の様子を観察した，この方面は谷深く，山は嶮

しいと見て西の方，西原の岡を南に迂回して西の谷に向うことにした，やがて西原の，西の谷，今の金立道の入口に徐福一行が達したが，ここから愈々山道に入ることになるので，改めて山案内人を求めることにした，幸い野良仕事をしていた百姓姿の八百平を見付け，この人に案内を請うた，八百平は心良く承知し持参の鎌を以って行手の草や荊や或は桂木の枝を伐り払いながら山上へと向い，遂に金立山上に到達することが出来た．

斯くて一行はこの山上に住みつき，今後の植民計画を練った，又目的の不老不死の薬の探求にも努力した．

ある日徐福が現在の金立神社上宮の東側の崖下の谷間，即ち昔の金立山雲上寺境内庭にある蓬萊島と弁財天堂のある附近に立っていると，天の一角から五色の雲に乗った弁財天女が現われ，静かに降りて来て，汝の探す不老不死の薬はこれなるぞと，一つの霊草を授けた，この霊草を貰った地点が後に蓬萊島と名づけられた，又金立山雲上寺開山以来，この島の上に堂が建てられ弁財天を祀ることになった．

註:

金立神社は金立山の頂上近くにあり，祭神として次の方々が祭つられてある．

保食神（ウケモチノカミ）（豊受大神）（五穀の神）

水の神（伊邪那美命の御子）

秦の徐福（農耕養蚕医薬の神）

天忍穂耳命（天照大神）

この神社は古代神武の朝に創設されたものといわれ，徐福がこの神社に合祀されたのは徐福が日本に渡航入国後，相当年月を経てから彼れの徳を慕って合祀したものと思われる．

徐福が渡来した頃の本土は人口も少なく，従って金立山附近に於ても山中の一部と山麓地帯に僅かの人達が生活を営んでいたに過ぎない，そして文化の程度は低く徐氏一族によって農耕，養蚕の方法，医薬の知識等が開発されたことは想像される．

山麓地帯には古墳散在し竪穴式住居跡あり，ここに縄文式や弥生式文化の花が咲いていたことがしのばれる．

8. 徐福の得た霊薬

金立山に分け入った徐福は不老不死の霊薬の発見に苦労を重ねたが，幸い弁財天のおかげで遂に目的の霊薬を手に入れることができた．

この霊薬は黒蕗（クロフキ）という薬草であった，クロフキは不老不死のなまりだという説もある，それは兎も角としてこのクロフキと称する植物の本体はなんであるか明かでない，或人はウマノスズクサ科に属する宿根草の一つであるという，而してこのものは暗紫色の釣鐘形の花をつけ，根は舌がひきつけられる程辛い，そして辛いほど薬効は強いといわれ，祛痰，利尿，浮腫，動脈硬化等に効き，殊に強精剤として有効であると述べている．

又一説によればウマノアシガタ科の植物であるという，併し牧野富太郎氏の植物図鑑を見ても，クロフキに関する記載はない．而してウマノアシガタ科にはアオイ類とサイシン類があって，サイシン類に属するウスバサイシンは解熱薬に使われるが葉の形，花の形はクロフキとは異なっている．むしろアオイ類に近い，この類のダイリンアオイは西日本，九州地方に広く繁茂していて，解熱薬に用いられているから，この一種かも知れない，併し普通アオイ類は葉の裏に細かい毛があるが，クロフキには毛がない，葉の形は似ていて，又葉の表面は青藍色でこれに銀青色の斑紋が現われている，なおアオイの成分としては今日迄の所サフロール，オイゲノールが発見されているのみである．従ってクロフキの植物学研究は今後に期待したい．

又徐福が熊野地方で得た不老不死の霊薬は天台烏薬（或は十薬であったともいわれる）であった，この植物はクスノキ科に属し，昔から腎臓病，リウマチ等に効ありとせられている．常緑灌木で熊野地方と日向の高千穂附近以外には見付からない，含有成分としては根にリンデラン，リンデレン，リンデロールその他が発見されていたが，その後，薬博武

田健一氏の研究によってボルネオールとリンデアヅレンの存在が明にされた，この中ボルネオールが広い意味で起死回生の効があるいことが言えるかも知れない．

付 記:

本稿をまとめるに当り熊野地方並に九州佐賀地方に視察研究旅行を行った，この調査旅行並に必要な各種文献蒐集には長崎県薬剤師会副会長で佐世保市在住の武田吉之亮氏及び福岡市の第一薬科大学長松野俊雄博士の御配慮と御尽力を煩わした，茲に深尽の謝意を表する．

昭和 48 年2月3日

—— 会 務 報 告 ——

日本薬学会第94年会は昭和49年4月4日～7日まで仙台市で開催され，薬史学部会はその2日目（4月5日）教養学部 B204 教室で行われた．研究報告9題の外，今日，東北地方で観光資源植物のように扱われているベニバナをテーマに捉え，その香粧史を山下愛子氏，栽培史を三浦三郎氏，薬物利用史を伊藤和洋氏に論述して貰い，近代薬学的に位置づける目的でシンポジウムを行った．

本巻も1～2号合併号に編集せざるを得なくなり，また幹事会で意図した記事を充分盛ることが出来なかった．最近の薬史学関係論文などの一部は，日本医史学雑誌20巻4号（49年10月刊）あたりを参照して頂ければ幸甚です．

次号10巻には通巻目録など掲載の予定です．

日本薬史学会会則

第1条　本会は日本薬史学会 The Japanese Society of History of Pharmacy と名付ける.

第2条　本会は薬学，薬業に関する歴史の調査研究を行い，薬学の進歩発達に寄与することを目的とする.

第3条　本会の目的を達成するために次の事業を行う.

1. 総会（毎年日本薬学の年会の時に行う）
2. 例会（研究発表会，集談会）
3. 講演会，シンポジウム，ゼミナール，その他
4. 機関誌「薬史学雑誌」の発行. 当分の間年2回とする.
5. 資料の収集，資料目録の作製.
6. 薬史学教育の指導ならびに普及.
7. その他必要と認める事業.

第4条　本会の事業目的に賛成し，その目的の達成に協力しようとする人をもって会員とする.

第5条　本会の会員は会費として年額 1,000 円を前納しなければならない. 但し学生は年額 500 円とする. 賛助会員は本会の事業を協賛する人または団体とする. 賛助会員は年額 5,000 円とする.

第6条　本会に次の役員をおく. 会長1名，幹事若干名，評議員若干名，役員の任期は2カ年とし重任することを認める.

1. 会長は総会で会員の互選によって選び，本会を代表し会務を総理する.
2. 幹事は総会で会員の互選によって選び，会長を補佐して会務を担当する.
3. 幹事中若干名を常任幹事とし，日常の会務および緊急事項の処理ならびに経理事務を担当する.
4. 評議員は会長の推薦による.

第7条　本会に事務担当者若干名をおく. 運営委員会は会長これを委嘱し，常任幹事の指示を受けて日常の事務をとる.

第8条　本会の事業目的を達成するため別に臨時委員を委嘱することができる.

第9条　本会は会長の承認により支部又は部会を設けることができる.

第10条　本会の会則を改正するには総会で出席者の過半数以上の決議によるものとする.

第11条　本会の年度は暦年（1月より12月まで）とする.

第12条　本会の事務所は東京都千代田区神田駿決台日本大学理工学部薬学科内におく.

日本薬史学会役員（昭和49年3月現在）

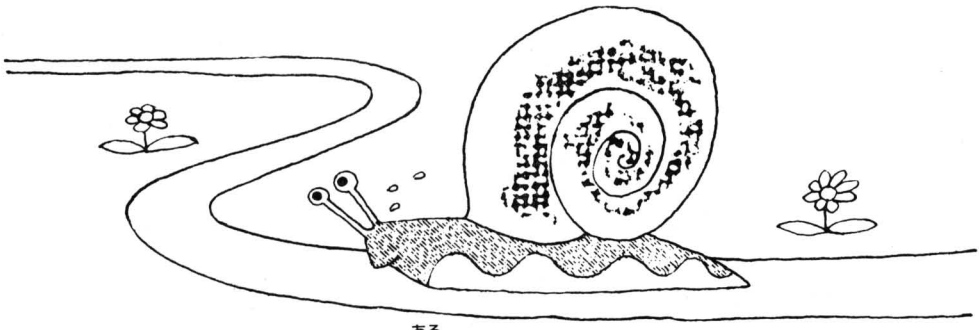
○印は常任幹事

会長　朝比奈泰彦

幹事　川瀬　清　三浦　三郎
　　滝戸　道夫　長沢　元夫
　　○木村雄四郎　○吉井千代田
　　清水藤太郎

（地方）宗田　一　難波　恒雄

D-E4,7412



歩(ある)コロジー賛成！
そして――――――
歩きましょう！という人がふえました。賛成！私たちはあまりにも〝自分の脚を使うこと〟を忘れていました。

老化は脚から…
脚は心臓からもっとも遠く離れています。そこへ20代から始まる動脈硬化や運動不足が加わると、〝脚の血行〟はますます悪くなります。「弱くなったなあー」という実感が脚からおこってくるのはそのためです。

脚のだるさ、ひきつりにユベロン
脚を使いましょう。そしてビタミンEのユベロンをお試し下さい。ユベロンは脚の血行をよくし、うっ血をとって、膝の痛みやふくらはぎのこわばりを和らげます。

脚の痛み、こわばりに
エーザイの
ユベロン
包装／90・160カプセル

エーザイは、原料から製剤まで一貫して生産している〔ビタミンEの総合メーカー〕です

Eisai